

【研究主題】

特別支援学校における一貫性・系統性のある
指導の在り方に関する研究

—知的障害のある児童生徒の p d c a サイクル
に基づいた授業づくりを目指して—

目 次

はじめに	41
第1章 研究主題に関する基本的な考え方	
1 一貫性・系統性のある指導とは	42
2 知的障害のある児童生徒の授業づくり	43
(1) 知的障害のある児童生徒の教育課程編成の基本的な考え方	43
(2) 全体指導計画と個別の指導計画, 授業の関係	43
第2章 実態調査	
1 調査の目的と内容	45
2 調査の方法等	45
3 調査の結果	46
4 調査のまとめ	50
第3章 p d c a サイクルに基づいた授業づくりの視点	
1 実態把握に基づく具体的な目標設定の在り方【plan】	51
(1) 基本的な考え方	51
(2) 実態把握について	52
(3) 目標設定の在り方	53
(4) 単元(題材)の設定	54
2 主体的な活動を促すための工夫や言語活動の充実の工夫【do】	54
(1) 主体的な活動を促す工夫	54
(2) 言語活動の充実を図る工夫	56
3 児童生徒の学習評価と教師の指導の評価の在り方【check】	57
(1) 児童生徒の学習評価	57
(2) 教師の指導の評価の観点	60
4 授業改善のための効果的な授業参観と授業検討会の進め方【action】	61
(1) 指導者全員で行う授業づくり	61
(2) 授業参観の観点及び記録用紙の工夫	61
(3) ビデオカメラ等の効果的な活用	62
(4) 学習指導案拡大シートの活用	62
第4章 授業づくりの実際	
1 指導の一貫性を目指したチーム全員参加型の授業づくりの工夫 (A特別支援学校の取組)	63
2 評価の方法を改善し, 指導と評価の一体化を目指した授業づくりの工夫 (B特別支援学校の取組)	69
3 実態把握を踏まえ, 教科の系統性に基づいた指導内容の選択・組織に視点を当てた工夫 (C特別支援学校の取組)	74
第5章 成果と課題	
1 研究の成果	79
2 今後の課題	79
おわりに	80
引用・参考文献	80

平成21年3月、特別支援学校の学習指導要領は、社会の変化や幼児児童生徒の障害の重度・重複化、多様化などに対応し、障害のある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育や必要な支援を充実するという点から改善された。具体的には、①幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教育課程の基準の改善に準じた改善を図ること、②障害の重度・重複化、多様化に対応し、一人一人に応じた指導を一層充実させること、③自立と社会参加を推進するため、職業教育や進路指導を充実させることが明記され、加えて、特別支援学校のセンター的機能・役割の明確化、障害のある幼児児童生徒と障害のない幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設けることなどが明示された。

また、特別支援教育を取り巻く国の動向として、平成23年8月に障害者基本法が改正されるとともに、平成24年7月に中央教育審議会初等中等教育分科会から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」の報告がなされた。その中で、「インクルーシブ教育システムの構築のためには、障害のある子どもと障害のない子どもが、できる限り同じ場で共に学ぶことを目指すべきであり、その場合には、それぞれの子どもが、授業内容が分かり、学習活動に参加している実感・達成感をもちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうか」が最も本質的な視点である。」と示された。そのための環境整備として、小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意していく必要があることが示されている。

これらのことから、特別支援学校においては、特別支援教育に関する専門性の向上を図ることが、一層求められていると言える。

そこで、当教育センターでは、平成24・25年度、「特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方に関する研究－知的障害のある児童生徒のp d c aサイクルに基づいた授業づくりを目指して－」を研究主題として、調査研究に取り組んできた。一貫性・系統性のある指導については、幼稚園部・小学部・中学部・高等部などの学部を通した一貫性のある指導や、発達の段階や生活経験、生活年齢などを踏まえた系統性のある指導内容や指導方法の設定など、これまでも特別支援学校において取り組まれてきている。しかし、幼児児童生徒一人一人の思考力・判断力・表現力等の育成、障害の重度・重複化、多様化への対応、社会の変化に対応した職業教育や進路指導の充実、そのための個別の指導計画の一層の活用などを踏まえた取組としては課題があり、一貫性・系統性のある指導の在り方について、今一度問い直し、児童生徒一人一人の実態を細かに把握し、課題を見極め、丁寧な指導・支援を継続していくという、教員一人一人の特別支援教育に関する専門性を、一層高めていくことが必要である。

このような特別支援学校における指導内容や指導方法に関する研究は、今後数年にわたって取り組むべき研究であると考えた。特に今回の研究においては、最も対象児童生徒数が多い障害種である知的障害を中心に、その授業づくりの在り方に焦点を当てていくことにした。

具体的には、まず、県内各特別支援学校を対象とした実態調査を実施し、特別支援学校における教育課程の編成や個別の指導計画の作成や活用、授業づくりなどに関する課題を明らかにした。そして、その結果に基づき、知的障害のある児童生徒の授業づくりにおける、一貫性・系統性のある指導の在り方について、p d c aサイクルに基づいた「授業づくりの視点」として整理し、提案した。また、研究協力員の協力を得て、一貫性・系統性のある指導の在り方について、具体的な実践を通して検証を行ってきた。

本研究の成果が、障害のある児童生徒の授業づくりに生かされ、一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の一層の充実が図られることを期待したい。

【研究主題】 特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方に関する研究
 —知的障害のある児童生徒のp d c aサイクルに基づいた授業づくりを目指して—

1 一貫性・系統性のある指導とは

特別支援学校では、児童生徒の障害の重度・重複化や多様化の状況を踏まえ、一人一人に応じた指導の充実が求められている。つまり、的確な実態把握を行い、教育的ニーズを明らかにして作成した個別の指導計画に基づき、障害の特性や発達の段階に応じた指導をきめ細かに行うことが必要である。

そこで、特別支援学校においては、入学から卒業後までを見通した長期的な視点で、一人一人の教育的ニーズに基づく

指導内容や指導方法を明らかにし、児童生徒のその時々自立と社会参加を目指しながら、卒業後の豊かな生活に向けた取組が行われている。

その際、一人一人の指導内容や指導方法は、教科の目標や内容に基づき、発達の段階や生活経験、生活年齢などを踏まえた系統性のある指導を行うことが必要である。併せて、それらを、複数の指導者間で見直したり、各学部間で引き継ぎを行い、情報を共有したりして、一貫性のある指導を行うことが必要である（図1）。

ところが、特別支援学校の指導場面において、以下のような様子が見られることがある。例えば、Aさんの指導において、「一人の教師は写真カードを用いながら丁寧に言葉掛けて説明を行い、もう一人の教師は、言葉掛けのみで説明を行っていたため、Aさんは、教師の説明の内容が十分に理解できずに学習活動にスムーズに参加できなかった。」ということがあった。このように、複数の教師で指導に当たることが多い特別支援学校で、指導者間において児童生徒への指導方法が共通理解されず、一貫性のある指導が十分になされていないということは、児童生徒への効果的な指導という点から大きな課題と言える。

また、知的障害のあるBさんの教科別の指導において、「実態に応じて繰り返し丁寧な指導を行っているものの、指導内容が次の段階にうまく発展していかない。」ということもあった。知的障害のある児童生徒の具体的な指導内容については、児童生徒の障害の状態等に応じて、個別に各教科の具体的な指導内容を選択し、組織する必要がある。しかし現状では、実態把握の結果と各教科の系統性を踏まえて、今何を指導するのか、次にどのように発展させていくのかというような系統性のある指導に課題があると言える。

このように、一貫性・系統性のある指導が求められている特別支援学校においては、児童生徒の障害の重度・重複化、多様化などに伴い、一貫性・系統性のある指導の在り方を明らかにする重要

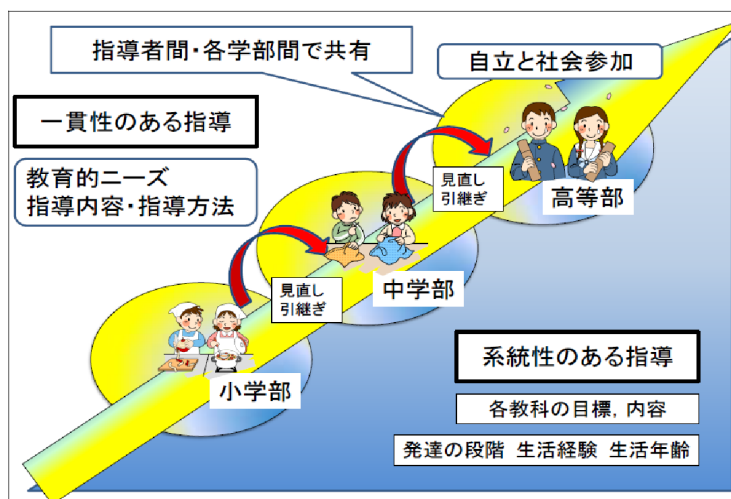


図1 一貫性・系統性のある指導

性が増していると考える。

本研究では、一貫性のある指導と系統性のある指導について、次のように整理した。

一貫性のある指導	一人一人の教育的ニーズや指導内容・指導方法などを明らかにし、指導者間及び学部間などで共有して指導すること
系統性のある指導	一人一人の指導目標や指導内容を、各教科の目標や内容、発達の段階や生活経験、生活年齢などを踏まえて指導すること

このような、一人一人の教育的ニーズに応じた「一貫性のある指導」や発達の段階や生活経験、生活年齢などを踏まえて設定された教科の目標や内容に基づく「系統性のある指導」が、日々の授業の中で、確実に行われることによって児童生徒のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立と社会参加を目指していくことができると考えた。

2 知的障害のある児童生徒の授業づくり

(1) 知的障害のある児童生徒の教育課程編成の基本的な考え方

特別支援学校学習指導要領解説総則等編（平成21年：以下「学習指導要領解説」とする。）では、教育課程編成の基本的な考え方について、次のように述べられている。

- ・ 全教職員が共通理解を図り、学校全体として一つの教育課程を編成していくという過程が不可欠となる。
- ・ 児童生徒に対する教育については、各学部間の接続を重視することなどが必要である。
- ・ 学校の教育目標の達成を目指して、「計画」→「実施」→「評価」→「改善」という過程を通して、毎年、改善が重ねられ、展開していくことになる。

また、学習指導要領解説では、知的障害のある児童生徒の学習上の特性として、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくい。また、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことなどが挙げられている。

このような特性を踏まえ、次のような教育的対応を基本とすることが重要である。

- ・ 実態等に即した実際の・具体的な内容を指導できるように指導内容を選択・組織する。
- ・ 児童生徒への関わり方の一貫性や継続性を確保する。
- ・ 目的が達成しやすいように、段階的な指導を行う。 など

このように、知的障害のある児童生徒の教育を行う特別支援学校の教育課程編成においては、実態等に即した指導内容の選択・組織、段階的な指導、教職員の共通理解、学部間の連携など、一貫性・系統性のある指導が大切であると言える。

(2) 全体指導計画と個別の指導計画、授業の関係

授業づくりを進めるとき、児童生徒一人一人に作成する個別の指導計画と、その児童生徒が所属する学習集団の全体指導計画の、両方の関連性をみて、授業づくりを行っていくことが大切で

ある。具体的には、図2のような流れである。

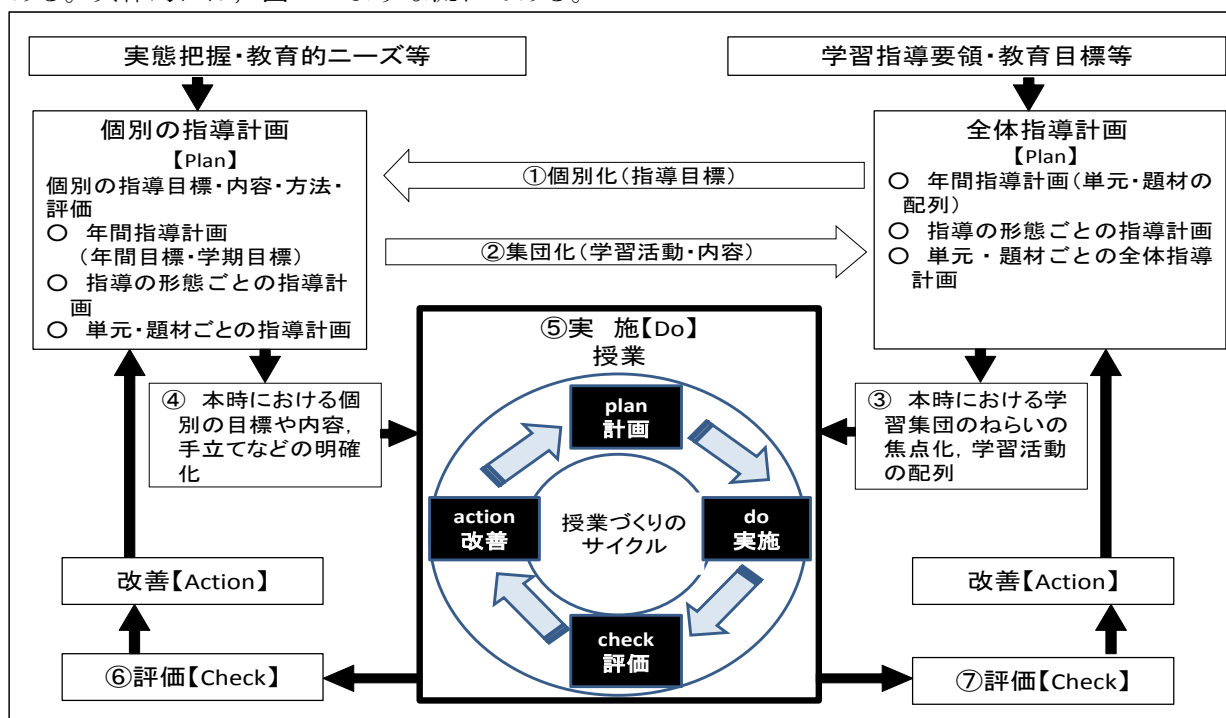


図2 全体指導計画と個別の指導計画，授業との関係

- ① 全体指導計画に設定されているその学習集団の単元（題材）における指導目標を，その児童生徒の指導の形態ごとの年間指導目標等に照らし合わせて具体化し，単元（題材）全体の個別の指導目標を設定する（個別化）。
- ② 個別の指導目標を達成できる学習活動を組織し，それを集約して全体指導計画の学習活動の設定や配列の見直しをする（集団化）。
- ③ 全体指導計画における指導目標や学習活動を基に，本時における学習集団全体の目標を設定し，学習活動を設定・配列する。
- ④ 個別の指導計画における，その児童生徒の指導目標等と，学習集団全体の本時の目標を基に，その児童生徒の本時の個別の指導目標や学習内容，手立てなどを設定する。
- ⑤ 本時の目標や学習活動に基づき，授業を行う。それぞれの1単位時間の授業において，形成的な評価を行い，改善を行う（実施）。
- ⑥ その児童生徒の学習状況や個別の指導目標の達成度を明らかにし，目標や学習活動の妥当性などを検討するとともに，手立ての改善につなげる（評価・改善）。
- ⑦ 学習集団全体の児童生徒の評価結果を集約し，全体指導計画の学習活動の設定・配列の見直しをする（評価・改善）。

このように，知的障害のある児童生徒の授業づくりでは，教育課程編成における「計画（Plan），実施（Do），評価（Check），改善（Action）」のサイクルに基づいた取組と，実施（Do）の1単位時間の授業において，全体指導計画や個別の指導計画に基づいて，児童生徒の実態を踏まえた本時の目標を設定し，授業を実施して，評価，改善を行うという取組が行われている。

本研究では，日々の授業の中で，一人一人の教育的ニーズに応じた一貫性のある指導や教科等の目標や内容に基づき発達の段階や生活経験，生活年齢などを踏まえて設定された，系統性のある指導が確実に行われているか見直し，改善を図りたいと考え，1単位時間の授業づくりのサイクルを

「計画 (plan), 実行 (do), 評価 (check), 改善 (action)」の「p d c a サイクル」と整理した。

そして, p d c a サイクルに基づいた授業改善を図ることで, 個別の指導計画や教育課程の見直しを行い, 一貫性や系統性のある指導を効果的に行うことができるようにしたいと考えた。

【P D C A サイクル】

教育課程編成における, 計画 (Plan), 実施 (Do), 評価 (Check), 改善 (Action) という取組

【p d c a サイクル】

1 単位時間の授業づくりにおける, 計画 (plan), 実施 (do), 評価 (check), 改善 (action) という, 本研究において整理した取組

第2章 実態調査

1 調査の目的と内容

特別支援学校における「一貫性・系統性のある指導」に関する現状と課題を把握するために, 次の3点について調査した。

調査内容

- ① 教育課程の編成と実施の状況
- ② 個別の指導計画の作成と活用の状況
- ③ 知的障害のある児童生徒に対する授業づくりの状況 (生活単元学習, 国語, 算数・数学)

2 調査の方法等

(1) 調査対象

全ての県立特別支援学校16校 (幼稚部1校, 小学部15校, 中学部15校, 高等部14校)

(2) 調査方法

質問紙調査法 (選択式, 一部記述式)

(3) 調査日

平成24年9月1日

(4) 回答者

調査内容①	教育課程の編成に関して, 中心的に推進している教師が, 学校の現状を把握して回答
調査内容② 調査内容③	各学校の各学部において, 中心的に推進している教師が, 各学部の現状を把握して回答

3 調査の結果

(1) 教育課程を編成する上での課題

【問】 教育課程を編成する上で、どのような課題がありますか。(自由記述)

教育課程を編成する上での課題についての回答では、図3のように、「一貫性・系統性のある編成」を挙げる学校が多かった。具体的には、「小・中・高等部の系統性のある教育課程の編成の在り方について」や「小・中・高等部の一貫性・系統性」、「各指導の形態ごとの横断的なつながりと学年間の発展性や継続性」などが挙げられた。次に、「指導内容・指導方法等の在り方」に関することが多く挙げられた。回答の内容は、「各教科等の指導方法」、「指導内容の精選と指導時期の検討」、「準ずる教育課程の基本的な考え方」、「指導目標や指導内容の明確化」などであった。以下、「障害種等に応じた編成」、「授業時数の確保」、「学校行事との関連」、「キャリア教育の視点」、「評価・改善の機能化」などが続いた。

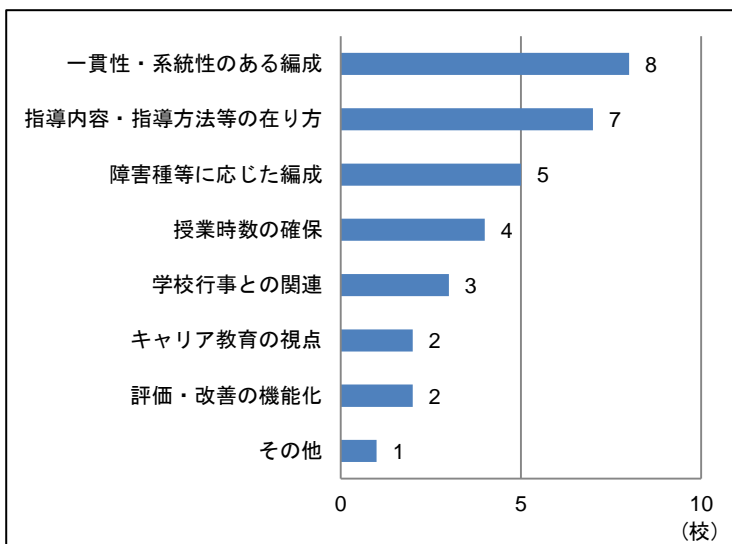


図3 教育課程編成上の課題（記述による複数回答）

(2) 教育課程を実施する上での課題

【問】 教育課程を実施する上で、どのような課題がありますか。(自由記述)

教育課程を実施する上での課題についての回答では、図4のように、「指導内容・指導方法等の在り方」が多く挙げられた。具体的には、「指導内容の精選」、「指導目標や指導内容の明確化」、「知肢併置校での合同学習の際の指導内容や指導方法の在り方」、「自立活動と各教科との関連」などの記述が多かった。

また、「教育課程の改善が不十分」、「評価の進め方と評価に基づいた編成の在り方」、「見直しのスパンと毎年の見直しの工夫」、「引継ぎが不十分」など、「評価・改善・引継ぎ」についても多く挙げられた。

なお、「その他」の回答内容は、「個別の指導計画・個別の教育支援計画との関連」に関すること、「行事の評価・改善」などであった。

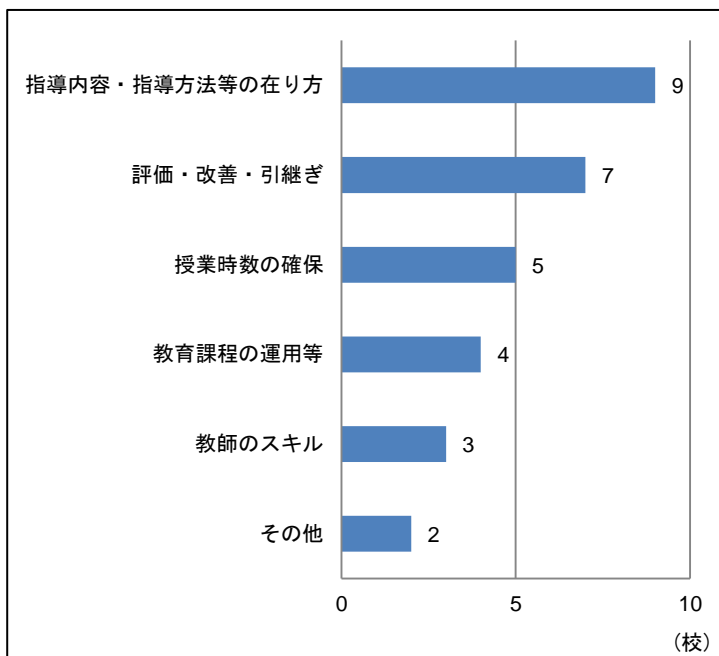


図4 教育課程実施上の課題（記述による複数回答）

(3) 日常的にお互いの授業を参観する機会

【問】 研究授業以外に、日常的にお互いの授業を参観する機会がありますか。また、参観するときどのようなことを工夫していますか。どのような成果がありますか。

研究授業以外に「授業参観をする機会がある」のは、図5のように、16校中7校であった。

授業参観の際の工夫としては、「授業参観週間」の設定等の時間の工夫が3校、「授業参観の視点を作成している」など効果的な授業参観の工夫が2校、その他に、「年度末に小学部6年・中学部3年（医療的ケア対象児を含む）の授業参観を実施している」や「学部間の交流研修を実施している」、「授業参観後にアンケートを実施し、結果を共有している」などの回答があった。

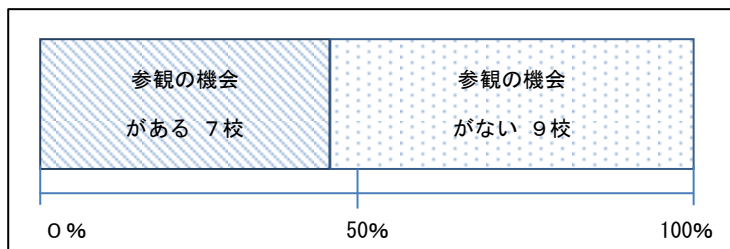


図5 日常的にお互いの授業を参観する機会

なお、研究授業以外に授業参観をすることの成果として、「教師間の共通理解が深まる」、「授業の展開の工夫、教材・教具の工夫、環境設定など新たな発見がある」、「各学部相互の授業参観により、将来像や系統性を意識できている」、「学部間で引継ぎ学年の授業参観を行っており、年度当初からスムーズな支援体制が取れている」などが挙げられた。

(4) 個別の指導計画作成における実態把握から目標設定までの課題

【問】 実態把握の結果から課題の整理、目標の設定に至る過程において、どのような課題がありますか。（自由記述）

この問いに対しては、図6のように、小・中・高等部共に「適切な目標・内容の設定」が多かった。具体的には、「実態に応じた目標・方法の設定」、「具体的な目標・内容の設定」、「検査結果を目標につなげていく考え方や手順」、「生活年齢と発達年齢を考慮した目標設定」などの回答であった。

次いで、「検討の場や方法の工夫等」が多かった。具体的には、「複数教師による課題・目標設定が難しい」や「多角的な分析の不足」、「担任・

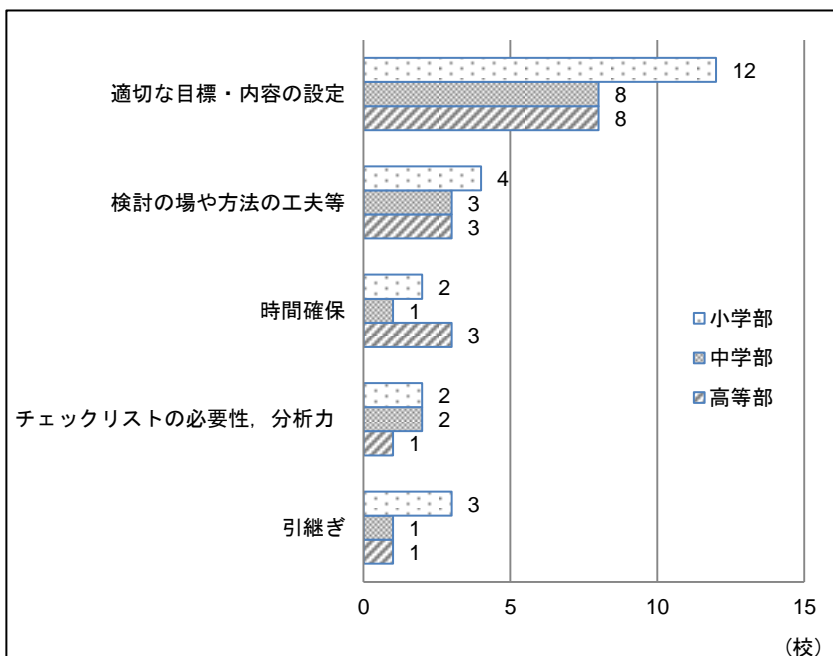


図6 実態把握から目標設定までの課題（記述による複数回答）

教科担当間の共通理解の難しさ」、「ミーティングの時間不足」などが挙げられた。その他、「時間確保」や「チェックリストの必要性、分析力」、「引継ぎ」の項目が続いた。

(5) 個別の指導計画の運用上の課題

【問】 個別の指導計画の運用上の課題は何ですか。(自由記述)

個別の指導計画の運用上の課題は、**図7**のように、「様式・表記等」に関するものが多く挙げられた。具体的には、「様式の統一が必要である」、「文字数の制限があり、児童生徒の状態像を十分記述することが難しい」、「記入資料の増加」などであった。また、「評価の方法」に関することも多く、「評価が困難」や「評価の検討のしにくさ」、「評価の方法、評価規準の設定」などが挙げられた。

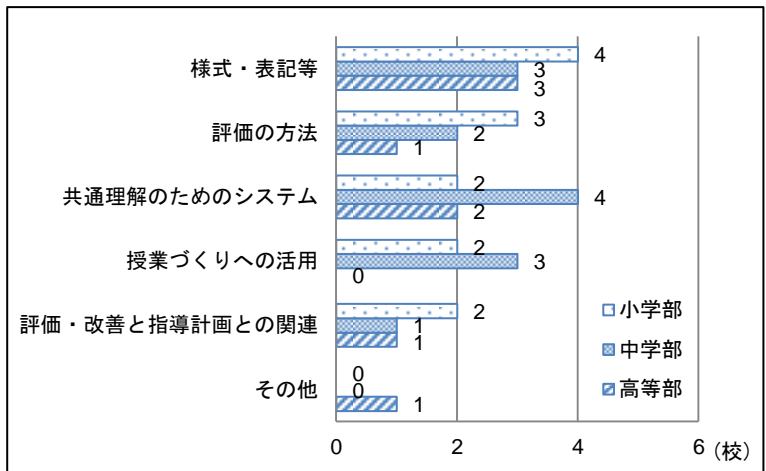


図7 個別の指導計画運用上の課題 (記述による複数回答)

その他、「共通理解が難しい」、「共通理解等に関する時間の確保が難しい」、「目標・評価の明文化が必要である」、「引継ぎが難しい」、「複数教師で検討する体制の整備が必要である」など「共通理解のためのシステム」が課題として挙げられた。また、「個別の指導計画と授業づくりをどうつなげていくか」などの「授業づくりへの活用」や「評価・改善と指導計画との関連」など、授業づくりの課題も挙げられた。

(6) 授業づくりにおいて学部で共通理解している指導の工夫と取り組みやすい工夫

【問】 学習活動において、学部で共通理解している指導の工夫は何ですか。また、共通理解していると答えた項目の中で、実際の授業において取り組みやすい工夫は何ですか。(選択肢による複数回答)

小学部の生活単元学習に関するグラフ (**図8**) で、特徴的な点を報告する。

共通理解されている工夫として、興味・関心をもちやすい「教材・教具の準備」、「学習の流れを明確に示す」などを挙げる学校が多かった。興味・関心をもちやすい「教材・教具の準備」については、全ての学校が共通理解している指導の工夫として挙げていた。また、共通理解している指導の工夫と取り組みやすい工夫との結果の比較において、その差が大きいものは、「主体的な活動場面の設定」であった。

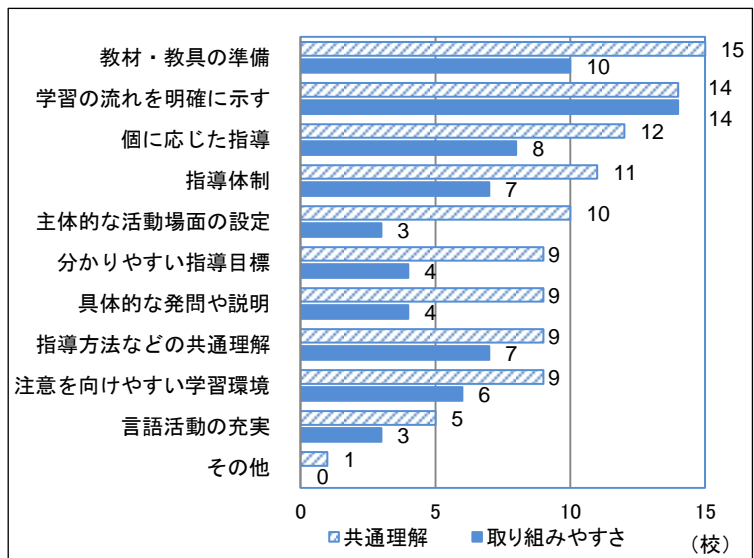


図8 共通理解している指導の工夫と取り組みやすい工夫 <小学部 生活単元学習> (複数回答)

なお、「言語活動の充実」は、共通理解も取り組みやすさも高くはなかった。このような傾向は、他の教科等や学部においても同様に見られた。

(7) 1 単位時間の授業における児童生徒の学習評価の方法

【問】 1 単位時間の授業における学習評価は、どのような方法で行っていますか。

児童生徒の学習評価の方法としては、図9のように、記述式の評価をしている学校が多かった。また、記述式と○△式の両方で実施している学校が、生活単元学習では3校、国語では3校、算数・数学では2校あった。○△式のみ評価をしている学校は少なかった。その他、前述の三つの選択肢以外の回答では、「担当者によって異なる」、「1 単位時間の評価ではなく、単元ごとに記述式で行っている」などが挙げられた。

なお、この調査項目は、小・中学部が15校（小・中学部設置校）、高等部14校（高等部設置校）が回答している。

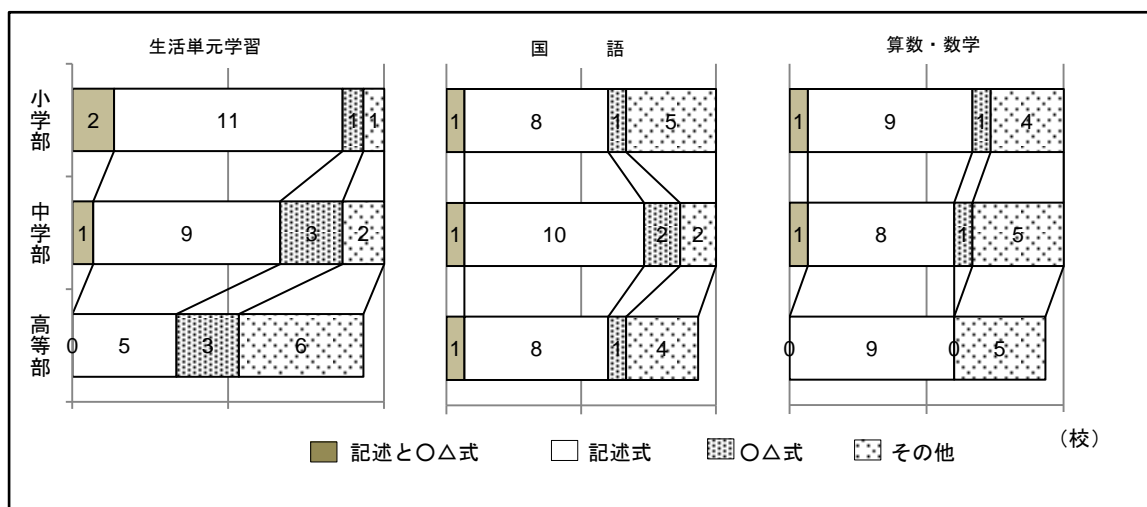


図9 1 単位時間における児童生徒の学習評価の方法

(8) 授業づくりにおける評価の課題

【問】 授業づくりにおける評価の課題について記入してください。

授業づくりの課題において、評価に関する自由記述では、「単元の評価は行うが、毎時間の評価がおろそかになっている」、「評価は各担当者の主観に頼ることが大きく、客観的な評価が難しい」、「評価の観点を明確に設定していないので、曖昧になってしまう」、「教師が同じ視点で、評価できるよう、評価項目の共有化が必要である」、「評価は教科担任のみで終わってしまう場合が多く、担任と共有して次の学習に生かすことができていない」などの課題が挙げられた。

(9) 1 単位時間の授業における教師の指導の評価の実施状況

【問】 1 単位時間の授業において、教師の指導の評価を行う際の課題は何ですか。また、その理由があれば記入してください。（自由記述）

教師の指導の評価は、調査を行った全ての教科等において、小学部が中・高等部よりやや多く実施していた。

教師の指導の評価が難しいと回答した学校の理由としては、「評価の観点が分からない」、「評価の観点が統一されていない」など、評価の方法が明確でないことや、「時間の確保が難しい」など、指導者間において、共通理解するための話し合い場面の設定が難しいなどの課題が挙げられた。

4 調査のまとめ

実態調査の結果を集約し、現状と課題について整理し、表1のようにまとめた。

表1 実態調査の現状と課題について

	現 状	課 題
教育課程の編成及び実施	○ 教育課程編成においては、「小・中・高等部の系統性のある段階的な教育課程の編成」や「小・中・高等部の一貫性・系統性」など、一貫性・系統性に関する課題を挙げる学校が多かった。また、指導内容・指導方法の在り方や障害の種類等に応じた教育課程の編成などが課題として挙げられ、様々な教育的ニーズに応じた教育課程の編成を各学校が模索していることが分かる。	○ 特別支援学校の教育課程編成において、一貫性・系統性のある教育課程の編成を行うための方法や手続きを明確にし、確認していく必要がある。
	○ 教育課程実施においても、「指導内容の精選」や「指導目標や指導内容の明確化」などの指導内容・指導方法の在り方に関する課題が多く挙げられるとともに、教育課程の評価・改善に関する課題も多く挙げられた。	○ 教育課程の評価・改善のシステムを見直し、指導内容・指導方法の在り方などの課題解決につなげるようにする必要がある。
	○ 日常的にお互いの授業を参観する機会は、ほぼ半数の学校で実施されていた。成果として、教師間の共通理解が深まる、児童生徒の将来像や系統性のある指導を意識できるなどが挙げられ、授業参観は、一貫性・系統性のある指導を進めるに当たり、大変重要であると言える。	○ 各学校において、授業参観の視点の共有やビデオ撮影などの工夫を行い、効果的で効率的・日常的な授業参観を更に実施していく必要がある。
個別の指導計画	○ 個別の指導計画作成において、多くの学校で実態把握の結果から、適切な目標の設定について課題があるという回答が挙げられた。このことは、児童生徒の障害の重度・重複化、多様化に伴う実態把握や分析の困難さ、前学年からの引継ぎの不十分さなどが要因として考えられる。	○ 実態を的確に捉えて、課題を整理し、適切な目標や内容を設定していく方法などを明らかにしていく必要がある。
	○ 個別の指導計画の運用においては、児童生徒の状態像を記述できない、評価の方法が不明確、複数の教師で検討する体制の整備が十分でないなどの課題が挙げられた。個別の指導計画を日々の授業の中で活用していく、システムが十分に確立されていないことが考えられる。	○ 個別の指導計画作成・活用のシステムを再検討していく必要がある。
授業づくり	○ 共通理解している指導の工夫として、興味・関心のある教材・教具の準備や学習活動の流れを明確に示すこと、個に応じた指導の工夫などが挙げられた。しかし、共通理解していても、取り組みにくいものとして、「主体的な活動場面の設定」があった。主体的な活動場面の設定については、実態差が大きく活動場面の設定が難しいこと、身に付けてほしい思いが先行し教師主導型になりがちであること、体験的な活動よりも机上での学習が多くなりがちであることなどが考えられる。	○ 主体的な活動を設定するためには、児童生徒一人一人の活動や参加の状況、主体的に活動できている場面とできていない場面の確認など、課題を整理することが必要である。
	○ 共通理解も、取り組みやすさも難しいものとして、「言語活動の充実」が挙げられた。「言語活動の充実」に関する指導内容や指導方法について、共通理解が不十分であることが考えられる。	○ 各教科等の特性を踏まえた言語活動について整理し、言語活動が充実している場面を見直し、特別支援学校における言語活動の充実の在り方について明確にする必要がある。
	○ 児童生徒の学習評価については、記述式の学校が多く、○△式のみでの評価は少なかった。「各担当者の主観に頼ることが大きく、客観的な評価が難しい」、「評価項目の共有化が必要」などの課題が挙げられた。 ○ 教師の指導の評価については、「評価の観点に分からない」などの課題が挙げられた。	○ 評価の方法について基本的な考え方や観点を明確にすることが大切である。特別支援学校においては、個人目標を具体化する際に、評価の方法等を記入するなどの工夫が必要である。 ○ 教師の指導の評価の観点例を作成し、授業参観や授業検討会において活用し、授業改善を行うことが必要である。

実態調査の結果から、1 単位時間の授業の授業づくりの p d c a の各段階において、表 2 のような課題が明らかになった。

表 2 授業づくりの p d c a の各段階における課題

	課 題
plan (計画)	<ul style="list-style-type: none"> 各学校において実施している実態把握の結果を、指導目標や指導内容にどのようにつなげればよいかを明らかにすることが必要である。
do (実施)	<ul style="list-style-type: none"> 本時の個人目標を踏まえ、共通理解して教材・教具を準備しているものの、主体的な活動や言語活動の充実の工夫についてより一層の充実が必要である。
check (評価)	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の学習評価に関して、記述式が多く行われていることから、複数の教師がそれぞれ評価する際の客観的な観点が必要である。 指導目標や指導内容の妥当性など、教師の指導についての評価の観点が必要である。
action (改善)	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態等から、1 単位時間全ての授業参観を行うことの難しさなどがあるため、授業参観の工夫が必要である。 指導者間で共通理解を図るために、短時間で効率的に授業検討会を行う工夫が必要である。

このような課題を踏まえ、1 単位時間の授業づくりの p d c a の各段階に着目して、授業改善を図るためには、指導者間の共通の視点が必要であると考えた。そこで本研究では、図 10 のように p d c a の各段階それぞれに、授業づくりの視点を設定した。そして、共通の視点に基づいて共通理解や情報の共有を十分に行いながら授業改善を図ることで、個別の指導計画や教育課程の見直しを行い、一貫性や系統性のある指導を効果的に行うことができるようにしたいと考えた。

そこで、p d c a サイクルに基づく授業づくりの視点を取り入れた、授業づくりの方法について以下に述べる。

1 実態把握に基づく具体的な目標設定の在り方【plan】

(1) 基本的な考え方

学習指導要領解説では、児童生徒の障害の状態及び発達の段階などについて、次のように述べられている。

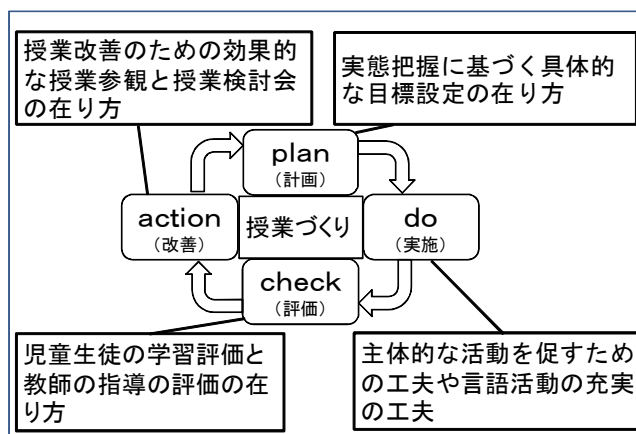


図 10 p d c a サイクルに基づいた授業づくりの視点

児童生徒の障害の状態は多様であり、個人差が大きい。また、個々の児童生徒についてみると、心身の発達に諸側面に不均衡が見られることも少なくない。各学校においては、このような児童生徒の障害の状態や発達の段階を的確に把握し、これに応じた適切な教育を展開することができるよう十分配慮することが必要である。

このように、障害のある児童生徒の教育においては、一人一人に応じた授業展開が求められており、そのためには、実態把握を丁寧に行っていくことが重要である。

授業づくりにおいては、児童生徒の実態に即した授業の目標と学習内容が一致していることが大切である。対象の児童生徒の実態把握に基づき、指導目標を決定し、目標を実現するために指導内容を適切に選択するなどの一連のつながりを意識して、検討し、改善する営みが教師の授業力を高めていく。「このような実態から、目標は〇〇になる。」「目標を達成するために、この題材、教材・教具、環境設定、展開をする。」など、つながりを明確にしていくことが大切である（図11）。手立ての根拠は目標であり、目標の根拠は実態である。また、授業を行いながら児童生徒の実態に関する情報を更に収集し、絶えず新しい児童生徒の情報の中から発達の課題を検討することが重要である。

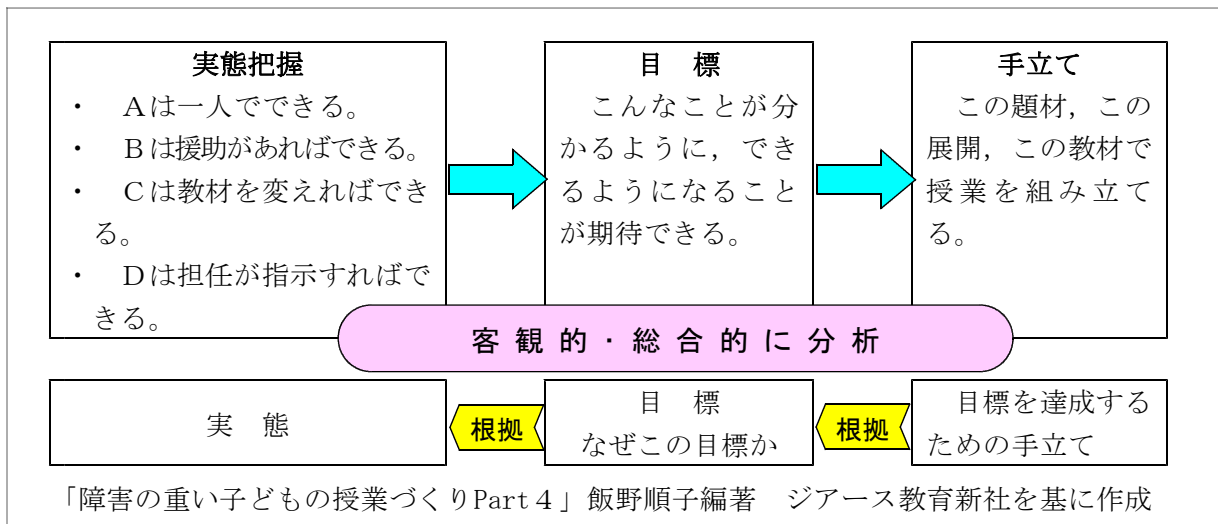


図11 実態と目標設定の関係

(2) 実態把握について

ア 実態把握

実態把握は、達成可能な目標を設定して、課題を明確にしていくために、現在の状態を客観的に知ることであり、何がどこまで、どのようにできるようになっているのか、分かっているかを知ることである（飯野 平成23年）。現在の状態を客観的に知るためには、行動観察や心理検査等の情報、学校で作成しているチェックリストの活用などが有効である。

そして、児童生徒の障害による学習上又は生活上の困難を的確に捉えるとともに、児童生徒が現在できていることや、指導すればできること、環境を整えればできることなどを総合的に把握することが大切である。

イ 一人一人の目標と手立ての明確化

実態把握を基に、これから学習する内容について、どこまでできているのか、どのようにできていないのか、活用できる力は何かなど、現在の力を客観的、総合的に分析することが必要

である。

これまでの授業の中で、どのような要素が影響し合っているようになったのか、どんな要素があればできるようになっていくのかなどを分析していくことで、目標や手立てが明確になると考える。

(3) 目標設定の在り方

ア 設定の際の留意点

全体目標を受け、個々の本単元（題材）の目指す姿を明確にし、目標を設定する際には、次のことに留意することが大切である。

(ア) 個別の指導計画との関連を踏まえ、目標を具体的に設定する。

(イ) 各教科等における「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」などの観点別の評価規準を踏まえて目標を設定することで、客観的な授業の評価につなげることが可能となる。

(ウ) 短期目標は具体的な行動目標を設定する。

- ・ 肯定的な表現（「〇〇できる。」「〇〇する。」など）
- ・ 行動を求めるときの条件（いつ、どんな状況のときの目標か）
- ・ 評価の対象となる行動の明確化（何を評価するのか）
- ・ 明確な達成基準（数値目標など）

イ 評価しやすい目標設定

目標は、誰が見ても分かりやすいように、児童生徒の具体的な学習状況を示すように設定する。また、目標設定の際には、個別の指導計画との関連を踏まえたり、各教科等の目標や内容、各校での授業で重点化した観点を設けたりする。そして、授業における目標は、具体的な行動目標とすることが望ましい。例えば、授業中に集中が途切れて立ち歩く実態の児童生徒に対しては、「3分間、色紙を半分に折る活動に取り組むことができる。」という目標を設定したり、言葉だけの指示では、活動になかなか取り組めずにいるという実態の児童生徒に対しては、「個別に絵カードを見せることにより、活動の場所に行くことができる。」という目標を設定したりすることが考えられる。

次に、具体的な行動目標の設定の例を右に示す。例えば、国語科の授業の中で、「平仮名を覚える」という

行動目標の設定（国語科の例）

- 言葉を聞いて、5回中3回は 絵カードを取ることが できる。
(行動を求めるときの条件) (明確な達成基準) (評価の対象となる行動の明確化) (肯定的な表現)
- 一人で手本を見ながら、文字カードを取ることが できる。
(行動を求めるときの条件) (評価の対象となる行動の明確化) (肯定的な表現)
- 読み手の言葉を聞いて、平仮名かるたを5枚取ることが できる。
(行動を求めるときの条件) (評価の対象となる行動の明確化・達成基準) (肯定的な表現)

学習活動における目標設定では、回数を明示し数量化したり、段階的に設定したりすることが考えられる。

このように、児童生徒の行動を成功の頻度や活動の量などで数量化して目標設定したり、発達の段階をスモールステップ化して目標設定したりすることで、児童生徒の評価が行いやすくなる。さらに、授業改善に向けての目標や手立てが明確になり、指導の評価を具体的に示すことが可能となる。そのためには、どこまでできているのか、どのようにできていないのかなど、現在の力を客観的、総合的に分析する必要がある。

ティーム・ティーチングの場合は、設定した目標を教師間で共通理解することが、目標達成のための第一歩となる。

(4) 単元（題材）の設定

単元（題材）は、目標を達成できるように、興味・関心を引き付け、分かりやすく、活動しやすいなど、児童生徒の主体性を引き出せる内容を設定する。設定する際に大切にしたい視点は、次のとおりである。

- ア 生活に即した必然性のあるもの
- イ 発達の道筋に沿った課題性のあるもの
- ウ それまでの指導内容と系統性のあるもの

なお、理解の広がりや深まりのある授業にするためには、教材そのものの価値を十分に分析し、教材研究をしておくことが重要である。

2 主体的な活動を促すための工夫や言語活動の充実の工夫【do】

児童生徒の主体的な活動は、自立と社会参加を目指すためにも大切であるが、知的障害がある児童生徒の場合、授業中、教師の説明の意味を理解できないために見通しがもてず、指示を待っていたり、教師の説明を聞く時間が長く、活動する時間が短くなってしまったりする場面がみられることから、工夫が必要である。

また、コミュニケーションの手段が少なかったり、言語での表現が難しかったりする児童生徒も多いことから、言語活動の充実については自立活動などで行っているものの、十分に意識されていない状況もみられる。

今回の学習指導要領の改訂では、特別支援学校においても、小・中・高等学校と同様に、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育む観点から、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語活動の充実が求められている。障害のある児童生徒にとっても、自分の考えや気持ちをいろいろな手段で表現する活動が大切であるため、各学校においては、今までの授業を振り返り、より意識的に言語活動を取り入れた授業づくりに取り組むことが必要である。

そこで、主体的な活動や言語活動の充実のための工夫について、観点と実践例を述べる。

(1) 主体的な活動を促す工夫

ア 学習のめあてや流れの明確な提示

児童生徒は、見通しがもてると、自ら活動しやすくなる。そこで、学習のめあてを板書したり、活動の流れを示したりすることが大切である。1 単位時間の授業の中で、授業全体の流れの提示と、実態に応じて個別の活動の流れを提示することで、「いつ、どこで、何を、どのように、いつまでに」行うかが明確になり、主体的な活動が期待できる。そこで、次のような工夫が考えられる。

- ・ 「いつ、どこで、何を」行うのかを視覚的に提示する。児童生徒の実態に応じて、具
体物や写真、絵、シンボルマーク、文字などを使用する。
- ・ 「何が、どれくらい、どうなれば終わりか、終わったらどうなるのか」というように、
課題の順番や量、時間などを分かりやすく示す。
- ・ 活動の手順を、写真カードなどで分かりやすく示す。 など

イ 自ら考えたり、自己選択・自己決定したりする活動の工夫

主体的な活動を行うためには、思考したり、判断したりしながら活動することが大切であるが、知的障害がある児童生徒は、そのような活動が苦手な場合が多い。そのため、自ら考えるための方法や判断したり、決定したりするための工夫を実態に応じて行うことが大切である。

そこで、次のような工夫が考えられる。

- ・ 具体物や半具体物などを用いて、操作的な活動を取り入れながら考えることができるようにする。
- ・ 選択肢から選んで答えることができるようにしたり、ヒントカードなどの判断の材料を用意したりすることで、自己選択・自己決定する場面を意図的に設定する。
- ・ 思考したり、判断したりするための十分な時間を確保する。 など

ウ 活動しやすい学習環境の工夫

知的障害のある児童生徒は、一度に多くの情報を処理することが困難な場合がある。そのため、教室内の情報量を調整し、必要な情報を捉えやすく、構造化して何をすればいいのか分かりやすくするというような学習環境をつくるのが大切になる。そこで、次のような工夫が考えられる。

- ・ パーテーションで周囲が気にならないように仕切ったり、活動と場所を一対一対応にしたりする。
- ・ 教材・教具の棚に写真や絵、文字を表示し、準備や片付けを児童生徒自身で行うことができるようにする（写真1）。
- ・ 黒板周りの掲示物の精選、教室の横や後方への掲示、黒板周りの棚へのカーテンの取付、板書の構造化、教師用の机上の整理などを行うことで、注目しやすくする。
- ・ 児童生徒の実態に応じて、学校全体で共通した絵やシンボルマークなどを使う。
- ・ 地域生活や社会生活などにおいても同じように見通しをもって活動できるように、地域生活や社会生活などで使用する機会の多い、文字やマークなどを取り入れる。 など



写真1 分かりやすい掲示の教材・教具棚

エ 児童生徒が活動する機会を多く設定する工夫

教師が説明することが中心となる授業では、児童生徒の活動量が少なくなりがちである。そこで、表3のように、一人一人の児童生徒が活動する機会が増えるように学習活動を見直し、児童生徒の役割を設定することが考えられる。そのことで、自分が行う活動が明確になり、活動量が増え、児童生徒がお互いの活動に、これまで以上に注目する機会を設定することができる。

表3 朝の会における役割分担（小学部の例）

主な学習活動	改善前	改善後
進行	教師	児童A
① 始めの挨拶をする。	教師 児童	児童B
② 朝の歌を歌う。(指揮をする。)	教師 児童	児童C 教師
③ 朝の挨拶をする。	教師	児童D
④ 日付、天気を発表する。	児童	児童E
⑤ 健康観察をする。	教師	児童F 教師
⑥ 今日の予定を発表する。	教師	教師
⑦ 終わりの挨拶をする。	教師	児童B

また、学年や学部、全校的にこのような役割分担の機会を設定することを共有し、実践することで、学年や学部が変わっても、児童生徒が見通しをもって主体的に活動することができる。

オ 教材・教具の活用の工夫

実態に応じた教材・教具を準備し、適切に提示したり、活用したりすることで、児童生徒が主体的に活動する機会を設定することができる。

写真2は、発表のポイントを示した教材・教具である。教材・教具の提示と同時に、適切な声の大きさはどれくらいか、どれくらいのスピードが「ゆっくり」か、どのように「はっきり」発表するのかを、教師が示して、児童生徒に考えさせたり、手元で確認できるカードなどを準備して、リハーサルをして確認させたりすることで、一人で活動することが期待できる。



写真2 留意事項の視覚的な提示

また、ICT機器を活用して発表場面を録画し、振り返ることができるような工夫も考えられる。

(2) 言語活動の充実を図る工夫

ア 教師の児童生徒への関わり方の工夫

児童生徒が安心して活動できるような雰囲気づくりを行うとともに、児童生徒の言語活動を充実させるためには、教師の児童生徒への関わり方が重要である。具体的には、次のような工夫が考えられる。

- ・ 児童生徒の発言や取組を肯定的に受け入れたり、児童生徒の伝えようとするペースに合わせてたりすることを大切にして、認めたり、褒めたりする。
- ・ 児童生徒や教師の行動や気持ちを言語化したり、発言を広げたり、補ったりして児童生徒が新しい言葉を身に付けられるようにする。
- ・ 「〇〇してはいけません。」ではなく、「〇〇しましょう。」のような肯定的で具体的な行動を指示することで、児童生徒が取り組むべき内容を分かりやすくする。
- ・ 児童生徒のモデルとなるように、正しい言葉遣いや適切な声の大きさ、状況に応じた表現をする。
- ・ 一つの活動に対して、一つの短く分かりやすい言葉掛けを行う。
- ・ 言葉による説明や指示だけではなく、視覚的な情報も併せて提示する。 など

イ 発表したり、報告したり、伝え合ったりする場面の設定

児童生徒のコミュニケーション能力には、様々な実態があるが、それを考慮しながら、児童生徒同士が発表し合ったり、報告し合ったり、伝え合ったりする場面を工夫することが大切である。そこで、次のような工夫が考えられる。

【コミュニケーション手段の工夫】

- ・ AAC (Augmentative and Alternative Communication : 拡大代替コミュニケーション) と呼ばれる、残存する音声や身振りやサイン、図形シンボル、コミュニケーション機器などの補助・代替手段を準備する。
- ・ 障害の状態が重度な児童生徒については、VOCA (Voice Output Communication Aid : 音声出力コミュニケーションエイド) などの機器を活用することも有効である。
- ・ 児童生徒が安心して話したり、書いたりして表現することができるように、発表話型や例文の短冊カードなどを準備する。 など

【児童生徒同士が関わる場面の工夫】

- ・ 児童生徒の言語能力や障害の状態に応じて、話し言葉以外の視線や表情、身振りやサイン、シンボルなどを通じた、児童生徒同士の関わるの場面を設定する。
- ・ 様々な場面を捉え、友達の前で発表する機会を設ける。
- ・ 児童生徒同士で伝え合うことができるように、小集団を構成し、自分の気持ちや考えを伝えるだけでなく、相手の話を聞く場面を設けたり、協力して活動できるような共通の話題や課題を準備したりする。 など

このように、児童生徒が主体的に活動するための工夫について、教師間や学部間で情報を共有し、共通の取組を行うことで、一貫した指導を継続することができる。

また、言語活動の充実については、自立活動や各教科において各学校で取り組んでいることを再確認し、特別支援学校における言語活動の充実とは何かということについて、学校全体で自校の取組を再整理することで、全員で意識化したり、共通の取組を行ったりすることが大切である。

3 児童生徒の学習評価と教師の指導の評価の在り方【check】

障害のある児童生徒の学習指導においては、障害の特性や発達の段階等の実態差が大きいことから、児童生徒一人一人の学習評価を適切に行うことが必要である。

(1) 児童生徒の学習評価

ア 基本的な考え方

障害のある児童生徒に係る学習評価については、以下のような考え方が示されている。

障害のない児童生徒に対する学習評価の考え方と基本的に変わるものではないが、児童生徒の障害の状態等を十分理解しつつ、様々な方法を用いて、一人一人の学習状況を一層丁寧に把握することが必要であること。また、特別支援学校については、新しい学習指導要領により個別の指導計画の作成が義務付けられたことを踏まえ、当該計画に基づいて行われた学習の状況や学習の結果の評価を行うことが必要である。

「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）
文部科学省 平成22年5月

また、特別支援学校に在籍する児童生徒への学習評価の考え方や工夫について、以下の点が述べられている。

- ・ 学習指導要領に定める目標に準拠して評価を行うこと（観点別学習状況の評価の実施）
- ・ 個人内評価を重視すること
- ・ 児童生徒一人一人の実態に即して、個別に指導目標や指導内容を設定し、個別に評価すること

「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 平成22年3月

イ 特別支援学校における評価の進め方

特別支援学校においては、個々の児童生徒の障害の状態が異なり、それぞれのニーズに即して適切な教育を進めていくために、多様な教育課程が編成されている。それらを踏まえて、

評価を考えていく必要がある。

(ア) 小・中学校等の各教科等に準じた指導を行っている場合

小・中学校等の学習指導要領に示された各教科等の目標・内容あるいは単元や題材ごとに、以下に示す観点別に評価規準の内容を具体的に設定した上で評価を進めることになる。その際、以下の観点を基本としつつ教科の特性に応じて設定することになる。

関 心 意 欲 態 度	各教科が対象としている学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているか。
思 考 判 断 表 現	それぞれの教科の知識・技能を活用して課題を解決することなどのために必要な思考力・判断力・表現力等を児童生徒が身に付けているか。
技 能	各教科において習得すべき技能を児童生徒が身に付けているか。
知 識 理 解	各教科において習得すべき知識や重要な概念等を児童生徒が身に付けているか。

(イ) 知的障害のある児童生徒に対する指導を行っている場合

a 教科別の指導

教科別の指導は、特別支援学校の学習指導要領に示されている知的障害特別支援学校の各教科の目標に基づき、障害の状態や発達の段階等に応じて具体的な指導目標や指導内容を設定して指導を行う。評価については、学習活動を考慮し、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」の評価の観点を踏まえて、より具体的な評価規準を設定することが重要である。以下に、1単位時間の授業における評価規準の例を示す。

小学部音楽科 題材「リズムに合わせて」 タンブリンで♪♪♪のリズム打ちをすることができる。 題材の評価規準	
音 楽 へ の 関心・意欲・態度	リズム打ちの楽しさを感じ取り、自分から進んでリズム打ちに取り組もうとしている。
音 楽 表 現 の 技 能	<ul style="list-style-type: none"> ・ タンブリンを正しく持って、音を出している。 ・ 教師の拍子打ちに合わせて、一人で♪♪♪のリズム打ちをしている。 ・ リズム譜を見ながら、♪♪♪のリズム打ちをしている。

b 各教科等を合わせた指導

各教科等を合わせた指導は、特別支援学校の学習指導要領に示されている知的障害特別支援学校の各教科等の目標や内容に基づいて指導を行う。そこで、各教科等を合わせた指導においても、学習評価の観点を踏まえながら評価規準を設定し、評価を行っていくことが大切である。以下に、1単位時間の授業における評価規準の例を示す。

中学部作業学習 題材「箸置き製作」 仕上げ作業において、見本を確認しながら、製品を仕上げることができる。 題材の評価規準	
関心・意欲・態度	自分から進んで、作業に取り組んでいる。
思考・判断・表現	完成品の見本を触って、仕上がりの状態が同じであることを確認し、出来高表にシールを貼る。

(ウ) 学習評価を行う際の配慮事項

a 本人に分かりやすい評価

知的障害のある児童生徒にとって、時間が経過してからの評価では、自分のこととして受け止めにくい場合がある。そのため、児童生徒の個人内評価を、日々の授業の中で意図的に行うことが必要である。その際、学習活動を自ら評価しやすくするために、児童生徒本人が評価しやすい具体的な目標を設定することが大切である。また、児童生徒が意欲をもって学習に取り組めるように、学習の結果だけでなく学習過程においても適切に評価することも必要となってくる。

評価方法としては自己評価、相互評価、他者評価があり、これらを実態や目的に応じて意図的に設定していく。

b 生活の中での評価

知的障害のある児童生徒にとって、自立と社会参加を図るために、身に付けた知識や技能を生活の中で生かしていくことはとても重要なことである。また、様々な生活場面において、自分で考え、判断し、表現することも大切なことである。そこで、1単位時間の授業の中での学習評価を行うとともに、学習した内容が学校生活や日常生活の中で活用され定着が図られているのかという観点から総合的に評価することが必要となる。

c 複数による評価

特別支援学校においては、ティーム・ティーチングで授業を行うことも多い。そこで、児童生徒一人一人の目標や評価規準等を事前に共通理解して、児童生徒の学習の状況を情報交換しながら評価していくことが必要である。

d 保護者に分かりやすい評価

児童生徒の学習評価については個別の指導計画に基づいて行うが、個別の指導計画は、保護者と共通理解を図りながら作成していく。また、学校で学習した内容を生活に生かして定着を図るためにも評価の手続きや結果を保護者と共通理解することが大切である。

特別支援学校においては、学習状況の評価を記述で伝えることが多いが、評価しやすい目標を設定することにより、保護者に分かりやすい評価を行うことが大切である。日常的には、連絡帳等を通して児童生徒の学習の状況や変容を伝えることも有効な方法である。

(エ) 評価記録の方法

評価記録の方法については、以下のような方法がある。

チェックによる記録 (例：○△式)	目標を数値化したり、行動目標で示したりするとともに、条件や達成率の基準を示すと、評価がしやすい。
記述式による記録	学習課題にどのように取り組んで、目標を達成できたのかなどを具体的な姿で評価することができる。
録画による記録	映像による記録が簡単に行え、より具体的な評価がしやすい。繰り返し映像を見ることによって、改善点が出しやすい。

知的障害のある児童生徒の評価については、○△式による「できたか、できなかったか」という結果を評価することも必要であるが、学習課題にどのように取り組んでいたのかその過程を把握することで、指導・支援や授業の改善につながっていくことに留意したい。

(2) 教師の指導の評価の観点

教師の指導に関する評価の観点を向上させ、確実に授業改善につなげるための評価の観点例を表4に示す。これらの観点例は、「知的障害教育における学習評価の方法と実際 ～子どもの確かな成長を目指して～（全国特別支援学校知的障害教育校長会 平成22年）」を参考に、「指導目標」、「指導内容」、「学習環境」、「指導方法」、「教材・教具」、「指導体制」の6領域にまとめた。評価の観点は、児童生徒の発達の段階や学習の状況なども考慮して工夫することも必要である。

表4 教師の指導の評価の観点例

領域	観 点 例	
指導目標	ア 実態に即したものであったか。 イ 具体的で分かりやすいものであったか。 ウ 教師が評価しやすいものであったか（数値や基準が示されていたか。）。	
指導内容	ア 目標を達成するのに適した指導内容であったか。 イ 生活に生かすことを、指導内容として考えていたか。 ウ 興味・関心をもちやすいものであったか。 エ 見通しをもちやすいものであったか。 オ 成功経験を得意やすいものであったか。	
学習環境	ア 注意を向けやすい学習環境が整っていたか（掲示物の精選、板書の構造化 など）。 イ 活動のしやすさを考慮した学習環境が整っていたか（机の位置、座席、動線の工夫、教室内の整理・整頓 など）。	
指導方法	ア 主体的な活動の工夫	(ア) 学習のねらいや学習の流れを明確に示し、学習活動への見通しがもてるようにしていたか。 (イ) 考える場面を設定していたり、時間を確保したりしていたか。 (ウ) 自己選択したり、自己決定したりする場面を設定していたか。 (エ) 役割に応じて活動できる場面を設定していたか。 (オ) 教材・教具等の準備や片付けなど児童生徒ができる活動を取り入れていたか。 (カ) 教材・教具を活用して、一人で活動できる機会を設定していたか。
	イ 言語活動の充実の工夫	(ア) 具体的で、分かりやすい発問や説明だったか。 (イ) 言葉掛けが多すぎたり、少なすぎたりしてはいなかったか。 (ウ) 発問の際の声の大きさ、速度は適切であったか。 (エ) できたことや、取組の経過について形式的に賞賛していたか。 (オ) 発表したり、報告したり、伝え合ったりする場面を設定していたか。
	ウ 個に応じた工夫	(ア) 段階的な指導をしていたか。 (イ) 反応を確認していたか。 (ウ) 支援が多すぎたり、少なすぎたりしていなかったか。 (エ) 実態や障害の状態に配慮していたか。
教材・教具	ア 実態に合った教材・教具であったか。 イ 興味・関心をもちやすい教材・教具であったか。 ウ 効果的に教材・教具の提示を行っていたか。 エ コンピュータなどのICTを適切に活用していたか。	
指導体制	ア 学習集団の構成が工夫されていたか（個別、ペア、グループ、習熟度別 など）。 イ ティーム・ティーチングにおいて、指導者間の共通理解が図られていたか。	

このように、学習指導と学習評価の観点を各学校で工夫し、共通の視点で授業を見直すことによって、児童生徒の目標の達成度や課題などが明確になり、次の授業に向けて、目標や手立てを検討したり、共有したりしやすくなると思われる。

4 授業改善のための効果的な授業参観と授業検討会の進め方【action】

授業研究は、研究授業とその前後の取組を含めたもので、研究授業前の授業計画の作成、研究授業の実施、研究授業後の授業検討会といった一連の活動として捉えることも大切なことである。指導者だけが授業計画を作成するのではなく、協力者を決めて協議しながら作成すると、関わった全員が自分たちの授業として研究授業を共有することができ、研究授業実施後の授業検討会でより率直な意見交換を行うことができる。

また、実際に授業検討会を効果的・効率的に進めるために、学習指導案から確認しておく事項や授業を参観する観点を明確にしておくことも大切である。そこで、これらのことについて以下に例を挙げて、授業参観のポイントを示す。

(1) 指導者全員で行う授業づくり

特別支援学校では、複数の教師で授業を行うことが多い。そのため、チーフ・ティーチャーだけが授業設計を行ったり、学習指導案を書いたりするのではなく、授業に関わる教師全員が協働して授業づくりを行うことが大切である。

例えば、ある特別支援学校では、チーフ・ティーチャーが授業の骨子を提案し、事前に全員で意見を集約し、学習指導案を指導者に回覧し、付せん紙を貼って意見を集約することで、共通理解を図ったり、指導者全員のアイデアを集約したりする工夫を行っている。

また、研究授業を参観するに当たり、参観者も授業研究を通して授業力を高めるための相互研修として、研究授業を行うということから、研究授業の指導者と協働するという意識を常にもつ必要がある。そのため、事前に学習指導案等を十分に熟読し、下記のような事項について確認しておくことが大切である。

- ・ 単元（題材）の意義や価値について
- ・ 児童生徒の発達の段階や興味・関心、指導計画作成上の位置付けについて
- ・ 指導上の留意点や教材・教具について など

上記の場合、児童生徒の発達の段階や興味・関心との関連で、その単元（題材）が設定されている理由が把握でき、指導者の授業意図がどのようなものであるか、どのような教材・教具を準備して指導を考えているかなど、「児童生徒」、「指導者の意図」、「教材・教具」の関連性を理解することにつながるものと考えられる。

(2) 授業参観の観点及び記録用紙の工夫

授業検討会における協議の柱を設定したり、指導者が検討してほしい事柄について協議を焦点化したりするために、授業参観の観点や記録用紙を工夫することが有効である。

ある特別支援学校では、前述した教師の指導の評価の観点例を活用して、**図12**のような「授業参観ミニカード」を作成し、参観の観点を絞り込み、「よかった点」や「気になる点」などを参観者が記録して授業検討会に臨むことができるように工夫している。

		観 点 例	よかった点	気になる点
指導方法	主体的な活動の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習のねらいや学習の流れを明確に示し、学習活動への見通しがもてるようにしていたか。 ・ 役割に応じて活動できる場面を設定していたか。 		
	言語活動の充実の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的で、分かりやすい発問や説明だったか。 ・ 言葉掛けが多すぎたり、少なすぎたりしてはいなかったか。 ・ できたことや、取組の経過について形成的に賞賛していたか。 		
指導体制		<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習集団の構成が工夫されていたか（個別、ペア、グループ、習熟度別など）。 ・ ティーム・ティーチングにおいて、指導者間の共通理解が図られていたか。 		

図12 指導の評価の観点例を活用した授業参観ミニカード

一方、お互いの授業を数値化して評価することは、難しい面があるため、「よかった点」、「課題点」、「私だったらこうしたい」というような参観者自身の意見を記入することで、自分たちの授業として研究授業を共有することができ、授業検討会を通してお互いの授業力の向上につなげることができる。

(3) ビデオカメラ等の効果的な活用

特別支援学校においては、児童生徒の活動をビデオカメラ等で記録して、授業の振り返りに活用することがある。その際、児童生徒の反応を記録するために、児童生徒のみを撮影することが多くみられる。

しかし、児童生徒の反応については、教師の関わり方との関連が大きいことから、**図13**のようにビデオカメラを設置して、教師や児童生徒の位置や動線を確認することも有効である。教室全体や教師、児童生徒の位置や動線を確認することで、児童生徒が主体的に活動し、教師がそのための工夫を行っているかということや学習環境の工夫など、客観的に授業を見直すことができる。

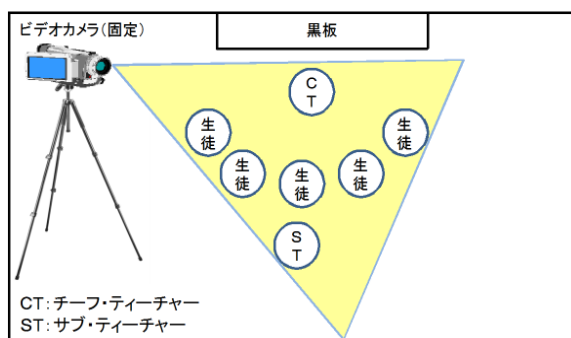


図13 定点撮影による授業記録

また、児童生徒の実態などから、授業参観の時間が限られてしまうことがある。そこで、授業参観時に時間が限られてしまう参観者については、後で録画した映像を確認したり、授業検討会時に録画した映像を流したりして、情報が共有できるようにすることが大切である。

(4) 学習指導案拡大シートの活用

効果的・効率的に授業検討会を行う方法として、参加者全員が気付いたことを付せん紙に記入し、意見を集約する、ワークショップ型の授業検討会の工夫がある。

ワークショップ型授業検討会は、**写真3**のように、一人一人の意見が出しやすく、主体的に参加しやすいというよさがある。また、多様な意見を集約でき、集約された意見や改善策については、共有化が図られるよさもあることから、各学校においても、授業検討会や校内研修(授業づくり)などにおいて活用することが有効である。



写真3 ワークショップ型授業検討会

ワークショップ型授業検討会を行う場合、授業参観前に付せん紙を配布しておき、前述した授業参観ミニカードなどを活用し、よかったところや気になったところについて、参観者が記入できるような工夫が大切である。

その際、**写真4**のような学習指導案拡大シートを用意し、授業参観が行われる教室の廊下等に掲示しておき、

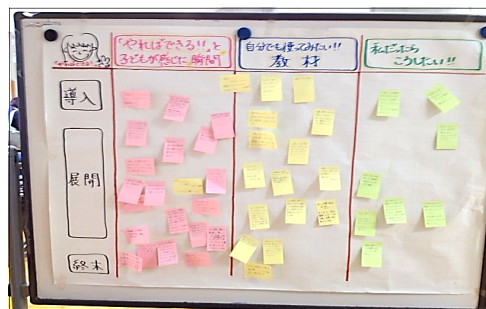


写真4 学習指導案拡大シート

参観者がそれぞれで付せん紙を貼ることができるようにしておく。また、似たような意見は近くに貼るように共通理解しておくこと、効率よく意見を集約することができる。

このような、p d c a サイクルに基づいた授業づくりの視点による授業改善を、全体指導計画や個別の指導計画の改善につなげることで、一貫性・系統性のある指導が充実していくと考える。

実態調査の結果などから、特別支援学校においては、それぞれの学校において実態把握を工夫して行っているものの、授業において具体的な目標設定や指導・支援の手立てが十分にできていないことが大きな課題であると言える。また、各指導者間でどのように情報を共有し、指導内容や指導方法を共通理解していくか、各教科等の指導の中で、個に応じた指導をどのように進めていくかということも大きな課題であると言える。

そこで、「授業づくりの視点」を活用し、指導の一貫性を目指したチーム全員参加型の授業づくりの工夫を行っているA特別支援学校の取組、評価の方法を工夫し、指導との一体化を目指した授業づくりを行っているB特別支援学校の取組、実態把握を踏まえ、教科の系統性に基づいた指導内容の選択・組織に視点を当てた工夫を行っているC特別支援学校の取組を紹介する。

1 指導の一貫性を目指したチーム全員参加型の授業づくりの工夫（A特別支援学校の取組）

（小学部 算数科 題材「かずしらべ（かぞえてみよう ～4から7までのかず～）」）

(1) 児童の実態

対象となる児童は、知的障害と肢体不自由を併せ有する3年生1人と4年生1人の計2人である。これまでの学習を通して集中して教師の話の聞いたり、提示された物をよく見たり、自分なりに考えたりするとともに、できたことや分かったことを喜ぶ姿が増え、学習意欲が高まり、自信をもてるようになってきている。

これまでの算数の学習において一対一対応をしたり、1から10までの具体物を数詞と対応させながら数えたり、数字を読んだり書いたり、数を指で表したりするなど数に関する学習に取り組んできた。その中で1から10の数詞を獲得し、順序よく数唱したり、正しく数字を読んだり、数を指で表したりすることができるようになりつつある。また日常生活の中でも日付や学級名、学級の人数、使う物の数などを意識して物を数えたり、数詞を言ったり、数字を読んだり、指で数を表したりするなど、数がより身近なものとなってきている。しかし、たくさんある物の中から指定された個数だけ取る課題では、全部の物を取ってしまう様子が見られた。このようなことから数の順序を理解し、数を唱えながら数えることができつつあるものの、数量としての理解がまだ曖昧であり、集合数としては捉え切れていないと思われる。

(2) 本題材のねらい

- 数詞と物を対応させながら、4個から7個までの具体物を数えることができるようにする。
- 1から10までの数を正しく数唱したり、指で表したりすることができるようにする。
- 4から7までの数字を読む（理解する）ことができるようにする。

(3) チーム全員参加型の授業づくり

A特別支援学校においては、「授業づくり打合せ」→「授業づくり」→「授業参観」→「授業検討会」の流れで指導の一貫性を目指したチーム全員参加型の授業づくりを行っている。具体的には、次頁のとおりである。

【授業前】

授業づくり打合せ：授業づくりの前に、参観の視点、協議の柱の確認をする。

授業づくり：チーフ・ティーチャーを中心に、チームで授業計画を立てる。必要に応じて模擬授業を行いながら、授業をつくる。

【授業】

「授業参観の視点」を基に、「よかった点」、「課題・改善点」を付せん紙に記入する。

【授業後】

授業検討会

- ・ 授業反省を基に、「よかった点」、「課題・改善点」を分類・整理する。
- ・ 協議の柱を基にアイデアを出し合い、共有する。
- ・ 授業者及び参加者が、授業に生かすことができるように、出されたアイデアを整理する。

(4) 指導の実際

ア 授業前

＜授業づくり打合せ＞（参加者：研修係、授業者）

- 1 授業の説明（授業者）
- 2 授業づくりの際に、メンバーと一緒に考えたいことの確認
- 3 「授業参観の視点」及び「協議の柱」の検討
- 4 「授業づくり」と「研究授業」の進め方の確認

＜授業づくり＞（参加者：研修係、授業者、学年部、各学部の教科担当者、学部主事）

- 1 指導案を基に授業の説明（授業者）
- 2 一緒に考えてほしいことの確認（担当）
- 3 意見交換（授業づくり）
 - (1) 授業づくりの柱「必然性を感じる」、「表現する」、「学び合う」について
 - (2) 他学部での取組について
 - ・ 授業のヒント
(学習集団や指導体制、具体的な指導場面の事例、学部としての考え方、指導方針等)
 - ・ 指導の一貫性や系統性
 - (3) 個別の指導計画の日頃の授業への活用について
 - ・ 題材の目標との関連、日頃の授業での活用状況等
 - (4) 授業者の思いを共有しながら、いろいろなアイデアを出し合う。
- 4 まとめ
 - (1) 出された意見や話題になったことの確認
 - (2) 授業者から（参考になった意見や今後の課題等について）

イ 授業

(ア) 目標

全体目標

- ドーナツ（5個から7個）をトレーに取り出したり、指で差したり、数ボードに並べたりして物と数詞を対応させながら数えることができる。
- 5, 6, 7の数字を正しく読んだり（選んだり）、指で数を表したりすることができる。

個人目標

A 児	<ul style="list-style-type: none"> ○ ドーナツを一つずつトレイに移動させながら、自分で数詞を正しく言い、注文された数を数えることができる。 ○ 教師が数ボードにドーナツを並べるのを見て、自分が数えたドーナツが注文された数と合っていたかどうかを確かめ、正誤に気付くことができる。 ○ 5, 6, 7の数字を正しく読んだり、指で数を正しく表したりすることができる。
B 児	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師と一緒にドーナツを一つずつトレイに移動させながら、声を出して、注文された数を数えることができる。 ○ 教師や友達が数ボードにドーナツを並べるのを見て、自分が数えたドーナツが注文された数と合っていたかどうかを確かめ、正誤に気付くことができる。 ○ 5, 6, 7の数字カードを正しく選ぶことができる。

(イ) 実際

	主な学習活動	指導の手立て		準備
		A児	B児	
↑ 導 入 (12 分) ↓	<p>1 始めの挨拶をする。</p> <p>(1) 題材名の確認をする。 「かぞえてみよう」</p> <p>(2) 大きな輪でリラックスする。</p> <p>2 今日の学習を知る。</p> <p>(1) 大きな輪がドーナツに変わる。</p> <p>(2) めあての確認をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">ドーナツをかぞえよう！！</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 10px;">5こ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 10px;">6こ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 10px;">7こ</div> </div> </div> <p>【お客】：数字カードでドーナツを注文する。</p> <p>【店長】：注文どおりにドーナツを数える。</p> <p>【みんな】：確かめる。</p> <p>(3) ドーナツ屋の場所や役割を確認し、準備をする。</p> <p>3 お客とドーナツ屋の店長の役に分かれて、ドーナツを注文したり、数えたりする。</p> <p>【お客】：数字カードでドーナツを注文する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 数字カードを選んで注文する。 <p>《評価》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 数字を正しく読んだり、選んだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ リラックスして楽しい雰囲気での学習をスタートできるように3人で大きな輪を使って数を数えながら体を動かしたり、関わりを楽しんだりする時間を設ける。 ・ ドーナツ屋さんへの期待を高めることができるように大きな輪がドーナツに変わってわくわくする場面を設ける。 ・ 楽しみながら、何を学習するかしつかり確認できるように、板書を使ってポイントごとに説明する場面を設ける。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本児のつぶやきを拾い、言葉でのやり取りを通して今日の学習のポイントが理解できているかどうかを確かめたり、励ましたりして意欲を高める。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今日の学習のポイントを理解できているかを本児のみに確かめる時間を設ける。 ・ 自信をもって学習に取り組めるように安心させ、励ますような言葉掛けを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 主体的に活動に取り組むことができるように役割を決める際には、児童同士で話し合っ決めて。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>【店長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 主体的に活動できるように座位保持椅子から降りてマットの上で活動を行う。 </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>【店長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ドーナツをトレイに入れることが難しいので、教師と一緒に操作をする。 ・ 本児が、声を出すのを </div>	<p>大きな輪</p> <p>ホワイトボード①</p> <p>題材名カード</p> <p>めあてカード</p> <p>学習のポイントカード</p> <p>帽子</p> <p>リボン</p> <p>看板</p> <p>マット</p> <p>ドーナツ(10個×3箱)</p> <p>トレイ</p>	

展開 (25分)

りすることができているか。

【店長】：注文どおりにドーナツを数える。

- ・ 10個あるドーナツから注文された数だけをトレーに数えて入れる。

《評価》

- ・ 具体物と数詞を対応させて数えているか。
- ・ 注文された数を数え終わったらドーナツをトレーに入れることをやめることができるか。



4 注文どおりに数えることができたかどうかを確かめる。

【みんな】：確かめる。

- ・ 数ボードにドーナツを並べて正誤を確認する。

《評価》

- ・ 正誤に気付くことができるか。

※ 3・4の活動を3回繰り返す



5 今日の学習のまとめをする。

- (1) 買ったドーナツをもう一度数えてみんなで食べる。
- (2) 振り返りカードで振り返りをする。

6 終わりの挨拶をする。

- ・ 自分で数える際には、教師は見守るのみで間違えていても言葉掛けはしない。
- ・ 注文の数を忘れないように途中でも何度かB児に数字カードを見せて伝える。

【お客】

- ・ 主体的に活動できるように自分でB児の店まで移動できるようにする。
- ・ 数字カードを選んで声に出して注文するように促す。
- ・ B児がドーナツを数える様子を最後まで見るように言葉掛けをする。

- ・ 待ってから教師が数詞を言って数を数える。
- ・ 数え始める前に、数字カードで数を確実に確認し、数え終わったかどうかは本人の身振りや発声で確かめる。

【お客】

- ・ 数字カードを見せて声を出して注文するように促す。
- ・ 数字を正しく読むことができているかを確かめるために、何個注文するかを教師と相談する場面を設ける。

数字カード

ホワイトボード②
数ボード (5・6・7)

- ・ お客の役割の際には、自分で数ボードにドーナツを並べる場面を設ける。

- ・ 本児が見やすい位置にボードを設置し、教師やB児が数ボードにドーナツを並べる様子に注目するように言葉掛けをする。

- ・ 自分で正誤に気付くことができるように数ボードとドーナツの入っていたトレーに注目させ、児童からの言葉や反応を十分待つ。

- ・ 正しく数えることができたときには、驚きの表情を見せて賞賛する。

- ・ 数え間違えたときは、再度最初から数え直すように促す。

- ・ 活動を切り替えることができるように「お腹が減ったから買ったドーナツを食べよう。」という言葉掛けをする。

- ・ 学習のまとめとしてドーナツを食べる前に、再度みんなで数えて確かめる場面を設ける。

- ・ それぞれの児童が頑張っていたことを具体的に例を挙げて賞賛し、振り返りカードに花丸やシール、コメントを付ける。

振り返りカード

シール

終末 (8分)

<授業参観>

- ・ 「授業参観の視点」を基に、「よかったところ」、「課題・改善点」について、付せん紙1枚につき具体的に1項目を記入し（写真5）、シートに貼る（写真6）。



写真5 付せん紙への記入



写真6 付せん紙の貼付

- | | |
|-----|-------------------------------------------------------------------|
| 視点1 | ： 児童が主体的に学習に取り組むことができたか。 |
| 視点2 | ： 物と数詞を対応させながら、注文された数のドーナツを数えたり、数ボードに並べたドーナツを見て正誤に気付いたりすることができたか。 |
| 視点3 | ： その他 |

ウ 授業後

<授業検討会>（参加者：研修係、授業者、学年部、各学部の教科担当者、学部主事）

- 1 進め方の確認（会順、時間等の確認）
- 2 授業者より授業の説明
 - ・ 題材（単元）設定の理由、これまでの経緯、ねらい、児童の様子、一緒に考えたいことなど
- 3 授業検討（出された意見等の抜粋）

- **視点1** について
 - ・ 学習活動に興味・関心がもてるように、教材・教具が工夫されていた。
 - ・ 授業者の関わり方（発問、問の取り方等）が、児童の発語を引き出していた。
 - ・ 児童同士がやり取りできる場面の設定がたくさんあった。
 - ・ 児童（肢体不自由）の活動量（学習量）の確保が課題であった。
→ 目標や学習内容の精選を行う。

- **視点2** について
 - ・ 数ボードで確かめをするときにも、児童が実際にドーナツをつかんでできれば、数を数え間違ったのか、合っていたのか実感できるのではないか。

- **視点3** について
 - ・ 数詞と数字、数量との一致をどうしていくかが、これからの課題である。
→ 抽象的な概念が苦手な児童生徒にとって、体を使って数える

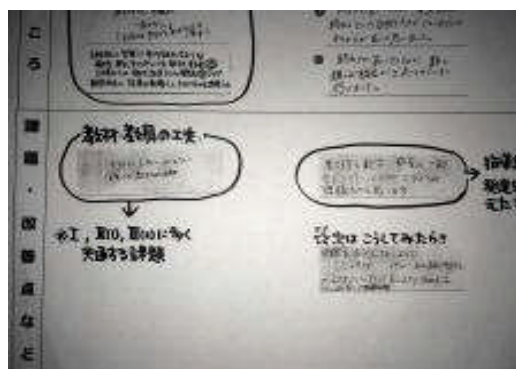


写真7 出された意見等の集約

ことが大切である。数詞と数字の架け橋となるため、ドットを活用してもよいのではないか。

- ・ 手指をうまく使えない児童への教材・教具をどのように工夫するか。
→ 実態に応じて操作性を工夫するとともに、ICTの活用を検討していくことも必要ではないか。

4 まとめ（研修係が、研究授業の内容を簡単にまとめて、校内LANで全職員に知らせる。）

- ・ 出された意見や話題になったことの確認
- ・ 授業者から一言（参考になった意見や今後の課題等について）



写真8 授業検討会の様子



写真9 検討結果の掲示

< 研究授業後の改善点 >

- 数を確かめる際などにも、児童が物を操作して数える時間を十分に確保した。
- 確かめボードの提示の仕方を工夫した。
→ ドットを数字カードと一緒に提示し、これが〇という数字であることを強調して、ドーナツとドットの数が同じかどうかで確かめを行った。正しく数えたときには、「ぴったんこ」の言葉掛けで数えることができたことを強く意識付けるようにした。
- 集合数と順序数の違いを、教師がしっかり意識して授業を進めた。
- 数える必要がある状況及び確かめができる状況の設定を工夫する。（3学期に実施予定）
例：パーティの準備をするような場面（人数とケーキやジュースの数合わせ 等）

(5) まとめ

ア 成果

- いろいろな意見を出し合うことによって、参加者全員のスキルアップにつながった。
- p d c a サイクルに基づく授業づくりをチームで行うため、対象児童への指導内容や指導方法について指導者間で共通理解を図りながら、一貫性のある指導を行うことができた。
- 授業づくりのチームである他学部の教科担当者の専門的な意見を参考にしながら、指導内容に見通しをもって系統性のある指導を行うことができた。

イ 課題

- 手続きや準備などを精選して、日常的に行えるような授業づくりのシステムづくりが必要である。

2 評価の方法を改善し、指導と評価の一体化を目指した授業づくりの工夫（B特別支援学校の取組）
（高等部 作業学習手工芸班 題材「校内販売会に向けた製品づくり」）

(1) 生徒の実態

作業学習の手工芸班での授業を対象として、評価方法を工夫し、授業改善を行った。

本班は、2年生1人、3年生4人の計5人で構成され、ビーズ手芸、縫製、紙袋の作業に取り組んでいる。

本班の生徒たちは、これまでの学習を通して、製作の工程、道具の準備や片付け、清掃等といった一連の学習活動に見通しをもち、自分から作業に取り組むことができるとともに、一定数の製品を作ることができるようになってきた。しかし、製品の良・不良に関しては、縫製では縫い線がずれていたり、ビーズ手芸においては、ビーズの数が一定でなかったりするなど、丁寧（正確）な製品作りに課題があった。また、報告や相談は、「お願いします。」など言葉を定形化している段階であり、生徒自身の言葉で、自分が困った状況での連絡や製品完成時の報告など、自分から発信することに難しい面が見られた。

これらの課題は、使う人に喜ばれる製品を作ろうという意識が低いこと、どのような形態が良品であるかの理解が不十分であること、良品を作ることができるように教師へ報告や相談をして、客観的な視点で良否を確認していこうとする意欲や意識が低いことが中心的な背景としてであると捉えた。実際に良品はどのような製品かの質問に対して、「きれいなもの。」と漠然とした返答であったり、活動反省の発表においては、「〇〇個作りました。」「時間いっぱい集中できました。」とねらいとは一致しない内容を回答する様子も見られた。

(2) 本題材のねらい

本題材は、校内販売会に向けた製作活動を通して、製品の良否を自分で確認しながら作業を進めたり、教師と一緒に確認するために主体的に報告や相談をしたりできるようにした。また、良品を作るために丁寧な作業を行い、相手に使って喜んでもらえることで、働く喜びを感じ、次の作業への意欲をもてるようにした。

手工芸班は、製品の種類や取り扱う材料が幅広く、布製品など身近な製品を製作するため、興味や意欲をもたせたり、生徒の実態に合わせた作業工程を設定したりすることができる。また、良品を作るためには工程ごとに正確に作業をしていくことが大切であり、報告をすることで製品の良否を判断する機会をもつことができる。

(3) 評価の工夫

このような実態や、題材のねらいに即した目標を設定し、生徒が理解した上で、意識して学習に取り組めるようにする。また、学習の振り返りにおいて自己評価を行うなどによって、評価の妥当性を高めていく指導の工夫を行っていくこととした。

月		日	曜日	
作業内容				
目 標				
項 目	内 容		自 己 チエック	先 生 チエック
挨拶	<input type="checkbox"/> 大きな声でした <input type="checkbox"/> 相手を見てした	<input type="checkbox"/> 言って礼をした		
報告 連絡 相談	<input type="checkbox"/> 大きな声でした <input type="checkbox"/> 相手を見てした	<input type="checkbox"/> 名前を呼んだ <input type="checkbox"/> 分からないことを聞いた		
身だしなみ 清潔	<input type="checkbox"/> えり <input type="checkbox"/> すそ <input type="checkbox"/> ベルト <input type="checkbox"/> エプロン			
時 間	<input type="checkbox"/> 遅れずにきた <input type="checkbox"/> 時間いっぱいした			
準 備 片づけ	<input type="checkbox"/> どうぐをじゅんびした <input type="checkbox"/> どうぐをかたづけした <input type="checkbox"/> そうじをした			
【反 省】				評価
【先生から】				評価
【担任の先生から】				

◎：よく(ぜんぶ)できた ○：(すこし)できた △：むずかしかった

図14 作業日誌様式例

ア 生徒による学習評価

学習を通して、生徒が明確な目的意識をもって授業に取り組めるように工夫、改善を行った。自己評価をより具体的にできるようにするために、例えば、作業日誌の内容を検討し、生徒の実態に合わせて3種類の様式の作業日誌に改訂した。毎時間の授業ごとに「作業日誌」(図14)を記入している。目標を導入時に確認、記入し、評価を終末の発表前に確認、記入するようにしている。

イ 教師の指導の評価

授業後の教師の指導の評価については、授業直後に、生徒への指導内容や手立てなど、5分から10分程度の短い時間で意見交換を行っている。意見交換の内容は、その日の当番の教師が指導記録簿に記入し、教師間で共有できるようにしている。

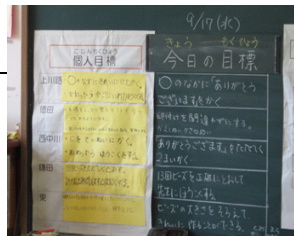
(4) 指導の実際



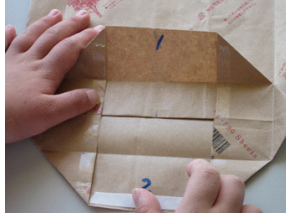



ア 本題材における個人目標

生徒	個人目標
A	<ul style="list-style-type: none"> ○ 製作したアームカバーの良否を自分で確認し、報告や相談をすることができる。 ○ 手本を手掛かりに、アームカバーの製作工程を理解し、正確に作るすることができる。
B	<ul style="list-style-type: none"> ○ ビーズを通した数を自分で確認し、補助具の文字を手掛かりに正しい言葉遣いで「終わりました。お願いします。」と報告をすることができる。 ○ 指輪のサイズに合わせた補助具を使い、決められた数のビーズを通すことができる。
C	<ul style="list-style-type: none"> ○ 作業が終わったら、自分から報告をすることができる。 ○ 手順表を見ることで、新しい指輪の手順を覚えて、正確に指輪を作ることができる。
D	<ul style="list-style-type: none"> ○ 製品を報告かごに入れることで、「○○先生、終わりました。確認をお願いします。」と自分から大きな声で報告や依頼をすることができる。 ○ 見本を示し、枠を書くことで「ありがとうございます。」と正しく書いたり、クリップで袋の口をとめることで、一人でひも通しをしたりすることができる。
E	<ul style="list-style-type: none"> ○ 製品を報告かごに入れることで、教師に自分から報告をすることができる。 ○ 枠や印を示すことで枠内に「ありがとうございます。」を書いたり、袋のバランスを考えて飾り付けをしたりすることができる。

イ 実際

過程(分)	主な学習活動	指導及び支援上の留意点	資料備
準備(10)	<ol style="list-style-type: none"> 1 窓, ドアを開放する。 2 机, 棚, 床等の掃除をする。 3 着座し, 始まりの態勢を整える。 4 副班長が教師へ始まりの連絡をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒たちが作業場準備の必要性に気付き, 主体的に取り組むことができるように, 視覚的な支援や言葉掛けを行うようにする。 	進行表
導入(15)	<ol style="list-style-type: none"> 5 始まりの挨拶をする。 6 出欠及び体調の確認をする。 7 「良品」についての話を全体で聞く。 8 本時の個人目標を各自で決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習への意欲を高められるように, 挨拶や返事の良かった生徒を具体的に賞賛する。 ・ 「良品」の理解を深めることができるように, 前時に生徒が作った製品の一つを話題にし, 良品, 不良品の説明をする。 ・ 本時の目標をより具体的にできるように, 各グループで教師と一緒に目標の確認をする。作業日誌にも目標を記入し, 意識化を図る。 	



展開 (50)	9 道具や材料の準備をする。	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に取り組めるように教材等の準備をするが、生徒の体調等の状況に応じて、言葉掛けや道具の場所に立つなどの支援をする。 		
	10 作業をする。 【縫製】(A) ① 布を折り曲げる。 ② 印を付ける。 ③ まち針でとめる。 ④ ミシンで縫う。	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に製作できるように、自分で書いた製作工程表を手掛かりにする。良・不良の理解を深められるように、1工程ごとに自己チェックしてからST(サブティーチャー)1へ報告する。 		
	【ビーズ 指輪花】(B) ① テグスにビーズを通す。 ② テグスを交差させる。 ③ ①②を繰り返す。	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に製作ができるように、手順表を手掛かりにする。また、良・不良の確認ができるように、工程ごとに担当教師に報告する。 		手順表
	【ビーズ 指輪リング】(C) ① 左右にビーズを一つ通す。 ② 片方のテグスに二つ入れて一方のテグスと交差させる。	<ul style="list-style-type: none"> 計画的に活動を行えるように、製作予定の個数を最初に確認する。 		補助具
【紙袋】(D・E) ① 底部を両面テープで貼る。 ② 袋を広げて、口部を内側に折り込む。 ③ 横部を内側に折り込んで畳む(CTが行う)。 (CT:チーフティーチャー) ④ 色画用紙に「ありがとうございます。」の文字を書く。 ⑤ 紙袋に④の色画用紙を両面テープで貼る。 ⑥ 口部の穴にひもを通して結ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> 良・不良の確認のため、工程ごとに担当教師に報告する。 報告の際は、「先生、終わりました。確認をお願いします。」などのメモや言葉掛けなどの手立てを行う。 正しい順番で貼れるように、数字を紙袋に記載したり、言葉掛けをしたりする。 文字カードを紙袋に水平に貼るように、手本を示したり、ひもを穴に通しやすいうように、紙袋の口を洗濯ばさみで挟んで閉じたりする。 	 	報告メモ 報告かご	
片付け (10)	11 道具や材料を片付ける。 12 机、棚、床等の掃除をする。 13 終わりの態勢を整える。 14 当番が終わりの連絡をする。	<ul style="list-style-type: none"> 片付けの合図は当番が行い、合図と友達の行動を手掛かりに主体的に行動できるようにする。 		
終末 (15)	15 各自での振り返りをする。 16 全体での振り返りをする。 17 終わりの挨拶をする。			製品 評価表 出来高表

ウ 評価

(ア) 生徒による学習評価

作業日誌を改訂したことで、本時の目標を明確に示すことができるようになった。具体的には、授業の導入時において、作業日誌を手掛かりに前時の評価を振り返り、教師と一緒に本時の目標(頑張ること)を具体的に考えることができた。考えた目標は、それぞれの生徒が理解を深め意識を高めるようにホワイトボードに記入し、黒板に掲示し、班全体でも確認できるようにした(図15)。

本時の目標(がんばること)

A 線からずれないように縫う。

B 花びらの形がそろうように、テグスを強くしめる。

C ビーズの数、12個を自分で確認して報告する。

D かみぶくろに一人でひもとのおす。

E かみぶくろに一人でかざりをつける。

今日、「目標」を頑張ろう！




図15 本時の目標の板書（導入時に掲示，確認）

終末時には、導入時に立てた目標に沿って、生徒が反省を発表するようにした。評価の基準を「◎：よくできた ○：できた △：むずかしかった」としているが、「～だったので、評価は～です。」と評価の根拠も述べるようにし、次時はどのように改善していけばよいかの手掛かりが得られるようにした。生徒が自分で考え自己評価するとともに、終末時に発表することで、相互評価もできるようになった。また、教師や同じ作業を行う生徒と一緒に考

本時の目標(がんばること)

A 線からずれないように縫う。

B そろうように、テグスを強くしめる。

C 12個を自分で確認して報告する。

D かみぶくろに一人でひもとのおす。

E かみぶくろに一人でかざりをつける。

学習の評価

A	○			
B	◎			
C	◎			
D	○			
E	○			

今日、2個作りしました。1個正確に縫うことができました。今日は、○です。

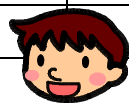


図16 学習の評価の板書（終末時に板書，確認）

えたり、教師の意見を参考にしたりすることで他者評価も行え、評価を深めることができるようにした。なお、評価についても上述の本時目標の横に評価表として掲示し、目標とのつながりを意識できるようにした。また、活動中の生徒自身の気付きや教師からの指導も評価に生かすような工夫も行った（図16）。

なお、作業日誌は、目標や評価のみではなく、挨拶や身だしなみ、時間厳守などの態度、習慣として身に付けていくべきものを作業のチェック項目として設け、生徒及び教師でチェックするようにした。

作業日誌書式(例2)

12月 9日 日曜日

作業内容	アームカバー(ミシン、糸縫い、印付け)			
目標	アームカバーを1組制作 自分で確認してから報告する。			
項目	内 容	自己チェック	先生チェック	
挨拶	<input checked="" type="checkbox"/> 大きな声でした <input checked="" type="checkbox"/> 相手を見てした	○	○	
報告	<input checked="" type="checkbox"/> 大きな声でした <input checked="" type="checkbox"/> 相手を見てした	○	○	
身だしなみ	<input checked="" type="checkbox"/> 団えり <input checked="" type="checkbox"/> 団すも(髪結) <input type="checkbox"/> 団ベルト <input type="checkbox"/> 団エプロン	△	△	
時間	<input checked="" type="checkbox"/> 遅れずにきた <input checked="" type="checkbox"/> 時間いっぱいした	○	◎	
準備片づけ	<input checked="" type="checkbox"/> どうぐをじゅんぴした <input checked="" type="checkbox"/> どうぐをかたづけした <input checked="" type="checkbox"/> そろじをした	○	◎	
【反省】		評価		
今日の目標は1組制作と立まりました。ですが、1組しか作れませんでした。糸がほつれやすかったので、もっと細く縫うことができました。		○		
【先生から】1組半の個数は次回はどうぞだと思います。良品を作っています。リットルから必要とすることがあります。道具をさす前に、この縫い糸はもうリットルをほつれさせないよう、よいかの相手をよく確認してください。次はもう1組お願いします。		◎		
【担任の先生から】きついです。もう少し声が大かいいいなあ。〇〇				

◎：よく(ぜんぶ)できた ○：(すこし)できた △：むずかしかった

図17 作業日誌

さらに、担任と授業担当者との連携が図りやすいように、担任の確認欄も設けた（図17）。

(4) 教師の指導の評価

授業直後に、5分から10分程度の短い時間で、生徒への指導内容や手立てなど、意見交換を行ったことで、その授業の評価や手立てに関する意見交換ができた。例えば、クラフトバンドを制作する生徒の指導について、次のような意見が挙げられた。「現在の教具では、一人でクラフトバンドを並べることは難しく、教師の支援が常に必要であった。また、教具が滑りやすいので、生徒の目と手の協応動作の実態では更に難しい。」そこで、教具を枠のついている教具に作り直すことにした。また、教具が滑りにくいように、滑り止めマットを使用することとした（写真10）。

なお、授業後の意見交換の際は、県総合教育センター平成24年発行の指導資料特別支援教育第168号「知的障害の児童生徒に対する指導の評価の在り方」を参考に、教師の指導の評価の観点を活用している。意見交換後に次時の目標や主体的な活動ができるような手立て、教材・教具の作成に取り組んでいる。

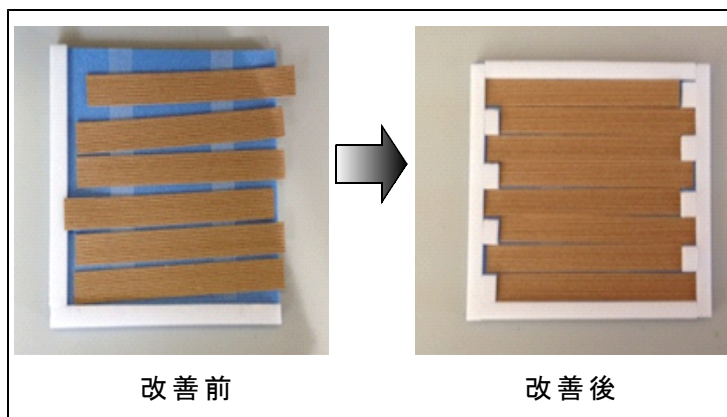


写真10 クラフトバンドの教材の改善

また、その観点を参考にした授業参観アンケートを作成し、授業研究等で担当教師以外の他者評価を行っている。

(5) まとめ

授業の評価・改善、次時の目標設定に生かせる評価の在り方に焦点を当てた授業実践を行った。評価を充実させるために、生徒に分かりやすく目標を設定し、意識して取り組む工夫をしたことで、生徒の学習への主体性が高まったと考える。

ア 成果

- 良品、不良品を明確に示すなど、目標を具体的に提示することで、生徒が主体的に活動できるようになった。
- 目標が具体的になったことで、生徒自身が自己評価や他者評価、相互評価をしやすくなった。
- 実態把握から目標をより具体的に設定したことで、授業後の教師間の話合いが焦点化でき、教師間が評価を共有しやすくなった。

イ 課題

- 生徒自身が、更に自己評価ができ、主体的な活動ができるように、作業日誌や導入・終末の工夫が必要である。
- 授業後の意見交換や授業ミーティングから、次時の目標設定・評価へつながるように、更に観点の工夫が必要である。

3 実態把握を踏まえ、教科の系統性に基づいた指導内容の選択・組織に視点を当てた工夫

(C 特別支援学校の取組)

(1) C 特別支援学校における算数・数学科指導の課題

C 特別支援学校では、卒業後の一人一人の豊かな生活を見据えて、算数・数学の指導においても、その実現のために必要な力の習得を目指している。

そこで、算数・数学の担当者グループでは、「将来の豊かな生活につながる小学部・中学部・高等部の系統性のある段階的な算数・数学科の教育課程の在り方」を研究し、一人一人の児童生徒の将来の生活につながる算数・数学科の系統的な一貫性のある指導の在り方を探ることにした。具体的には、各学部間で情報交換を行い、課題を出し合いながら、改善点を探り、小学部・中学部・高等部における系統性のある段階的な算数・数学科の教育課程の編成につなげていくことにした。

(2) 年間指導計画

ア 年間指導計画の見直し

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の学習指導要領における算数・数学科の目標や内容等や知的障害対象の算数・数学科の段階別一覧表を確認した上で、現在の年間指導計画を見直し、学部間の意見交換を繰り返し、共通理解を図った。また、学習指導要領の目標と照らし合わせ、各学部ごとに年間指導計画の見直しを行った。そして、内容を整理し、題材をまとめたものが表5の題材一覧表である。

表5 算数・数学科 題材一覧表 (平成24年度の校内研修で作成)

学部	小学部			中学部			高等部			
4月	数量の基礎・数と計算	なかまわけ	かず(1~10, 一対対応)	かず(2桁の数)	数あそび1 (10までのかず)	数あそび1 (100までのかず)	数あそび1 (1000までのかず)	数と計算 図形・数量 関係	数と計算 図形・数量 関係	
5月				かず	たしざん・ひきざん (10まで)	数あそび2 いくつになる	数あそび2 (10までの合成・分解)	数あそび2 加減法	量と測定	量と測定
6月										
7月	量と測定	おおきい・ちいさい	ながい・みじかい	ながい・みじかい	お金	お金	お金	数と計算	数と計算	
9月				くらべっこ (大小, 多少, 重軽)						くらべっこ (どちらが一番長い)
10月										
11月	図形と数量関係	かたち	かたち(まる, さんかく, しかく) ゲーム(○と×)	かたち(いろいろなかたち) みぎ・ひだり, うえ・した	とけいとこよみ, お金	時計と暦, お金	時計と暦, 時刻と時間, お金	実務	実務	
12月										

イ 「数量的な感覚」の捉え

Ｃ特別支援学校の算数・数学科の基本的な考え方を系統的にまとめると表6のとおりに整理することができた。特に、小学部・中学部・高等部において、「数量的な感覚」の育成が重要な課題であると考えた。

「数量的な感覚」とは、数や量に対する基本的な感覚のことを言い、数が大きい、小さいなどに加えて、桁が幾つ増えるかという大きさの感覚のことを言う。

「数量的な感覚」を豊かにするためには、児童生徒が自ら興味・関心をもち、数量を扱う必要性を感じ、目的意識をもって主体的に理解を深められるように、実生活に関連した具体的な内容を設定したり、「作業学習」や「生活単元学習」等の各教科等を合わせた指導と関連付けて、繰り返し学習する場面を設定したりすることが必要である。

表6 算数・数学科 基本的な考え方の系統性

学部	小学部	中学部	高等部
身に付けさせたい力	日常生活における数量的な感覚	社会生活を営むために必要な基礎能力になるもの	社会生活や経済生活を営むために必要な基礎能力になるもの
課題点	<ul style="list-style-type: none"> 生活経験の不足 遊びの体験の不足 学習への興味・関心、意欲の低さ 	<ul style="list-style-type: none"> 生活場面での基礎学力の活用に課題 	<ul style="list-style-type: none"> 数量的な経験の不足 数量的な感覚に課題
必要な指導	<ul style="list-style-type: none"> 実生活に結び付いた体験的で、より具体的な操作活動をする。 遊びやゲームを取り入れることで、学習への意欲を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 実際の生活、具体的な活動を通して、直接的な数量的な感覚の経験を積ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> 直接的な数量的な経験を拡大する。 数量的な感覚を豊かにする。 日常生活における処理能力を高める。

(3) 系統性を踏まえた検証授業の実施

各学部における算数・数学科の指導の成果と課題を出し合い、「数量の基礎」、「数と計算」に焦点を当て、指導内容の系統性を確認して実践を行い、検証した上で、次年度の教育課程の編成に生かすことにした。

その際、小学部・中学部・高等部の系統性のある段階的な指導が実践できるように表5の題材一覧を基に、各学部の基本的な考え方(表6)を踏まえ、「数と計算」について、検証授業を行っ

表7 「数と計算」に視点をおいた各学部の系統性のある段階的な指導に関する検証授業

学部	小学部 5年生1人	中学部 2年生5人	高等部 3年生6人
全体目標	<p>【2段階】</p> <p>身近にある具体物を数える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1から10までの数の概念を理解し、数詞(カード)から具体物を数えたり、数の大小の比較をしたりすることができる。 	<p>【3段階】</p> <p>初歩的な数の概念を理解し、簡単な計算をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 数の大小やまとまりについて理解することができる。 日常生活における加法の仕組みを知ることができる。 	<p>【6段階】</p> <p>生活に必要な数量の処理や計算をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで学んだことを使って、時間の計算やお金の計算ができる。 計算機を用いて、割引の計算が確実にできる。
画指 よ導 り計	<ul style="list-style-type: none"> カード並べ カードの穴埋め プリント学習 数を数える 計数 	<ul style="list-style-type: none"> 計数 大小比較 足し算(簡単な計算) 	<ul style="list-style-type: none"> 加法・減法 加法・減法が混合した計算等(計算機器の利用)
指本 導時 内の 容	<ul style="list-style-type: none"> カード並べ(計数、順序数) りんごがいくつ カード(ドット) ドット+数詞カード 	<ul style="list-style-type: none"> おはじき数遊び(計数) トランプ数遊び(大小比較) 加法(作業学習関連)文章問題 <ul style="list-style-type: none"> 全体指導 個別指導 	<ul style="list-style-type: none"> 100マス計算 現場実習関連問題 <ul style="list-style-type: none"> 計算機の使い方 お金の合計(加法) 時間の加法・除法
考基 え本 方的 な	<p>具体的な操作活動や遊び化、ゲーム化した活動を通して、児童の日常生活に必要な数量や図形などに関する初歩的な事項を理解させ、それらを扱う能力と態度を育てる。</p>	<p>日常生活に必要な事項を中心に、生徒の具体的・体験的な活動を通して、数量や図形の初歩的な事項を理解させ、反復練習により、理解を深め、それらを扱う能力と態度を育てる。</p>	<p>日常生活に必要な事項を中心に、生徒の具体的・体験的な活動を通して、豊かな数量的な感覚を身に付けさせ、生活の中での数量的処理能力を高める。</p>

た。まず、各学部ごとに指導内容を精選し、指導計画を作成した。そして、各学部で検討した指導計画を持ち寄り、小学部・中学部・高等部の系統性のある段階的な指導を念頭においた意見交換を行い、再度、指導内容（表7）を整理した。

ここでは、小学部の検証授業について述べる。

ア 題材等

- ・ 題材「10までの数（計数）」（数と計算）
- ・ 題材のねらい

数字を提示し、その数に対応した具体物を数えることを通して、数を量として捉えて、1から10までの数概念を身に付けさせる。

イ 児童の実態を把握するための工夫（対象：知的障害のある5年生1人）

県総合教育センター平成21年発行の指導資料特別支援教育第156号算数・数学科の「数量の基礎」, 「数と計算」の指導内容一覧を基に、小学部児童の実態を記入したものが表8である。既存の指導内容一覧を活用し、現在の実態を照らし合わせることで、明確に児童の実態把握をすることができた。

表8 「数量の基礎」, 「数と計算」の指導内容一覧

段階	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	6段階
目標	具体物があることが分かり、見分けたり、分類したりする。	身近にある具体物を数える。	初歩的な数の概念を理解し、簡単な計算をする。	日常生活にある初歩的な数量の処理や計算をする。	日常生活に必要な数量の処理や計算をする。	生活に必要な数量の処理や計算をする。
指導内容	個別化 身近にある物や人の名前を聞いて指さす。など 類別 同色の積木やボールを取る。など 分類・整理 いろいろなスリッパを対にして揃える。など 対応 皿や皿等を一人に1つずつ配る。など	数を数える 積木などを積んで数える。など 一対一対応 給食の配膳などで「同じ」「足りない」などの確かめをする。など 分類 用途や目的、機能等に注目して分類する。など 数唱 数を言葉で言う。など 計数 具体物と数詞を一対一対応をする。など	記数 絵を書く。など 大小比較 さいころ遊びなどをして数くらべをする。など 順序数 次の数を当てる、逆の順で数詞を言う。など 計数 10ずつまとめて数える。など 合成・分解 「5にいくつ足りない」などが分かる。など 簡単な計算 「合わせていくつ」が分かる。飴を2つずつに分ける。など	数え方の工夫 10ずつまとめた物を10個集める。紙や封筒を正しく数える。など 初歩的な計算 筆算で2位数以下の足し算などをする。「2の段」、「3の段」、「5の段」のかけ算をする。「等しく分ける」、「いくつに分ける」などが分かる。など ※計算機を使った計算の指導も関連付けて指導する。また、実生活の上で計算の意味や計算した結果の使い方について理解を図る。	大きい数の読み方 千、万の数を読める。書く、比べる「何羽」、「何杯」、「何組」等が使える。など 日常生活に必要な計算 3位数より大きな数の足し算をする。「4の段」、「6の段」、「7の段」、「8の段」、「9の段」のかけ算をする。 ※大きな数を扱う場合として、作業の際の材料や製品の数を数える、金銭を取り扱うなど、生活の中で必要感をもたせることが重要である。	加法・減法 100万までの計算をする。など 乗法・除法、加法と減法が混合した計算 計算機を使用する。納品書等で使われる大きな数を処理する。1000円のシャツの2割引がいくら分かる。など ※生活に結び付いた課題の解決に、乗法、除法、加法と減法が混合した計算を使う場合は、特に設問の意味を正確にとらえて計算式を立てる指導を重要視し、計算機を使用できるようにする。

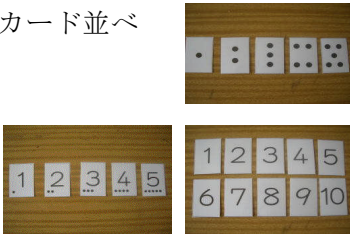





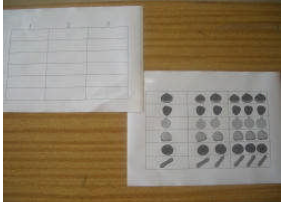
○ 達成しているもの △ 未達成のもの □ 課題となっているもの

ウ 指導の実際

(ア) 個人目標

児童	個別の指導計画の目標	本時の個人目標
A児	<ul style="list-style-type: none"> ・ 数字を読んだり、順番に並べたり、数字を見てその数の具体物を数えたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの学習を振り返ったり、3までの数字カードを見て、その数の具体物を数えたりすることができる。 ・ 学習の流れを理解し、落ち着いて学習に取り組むことができる。

(イ) 実際

過程	主な学習活動	指導・支援の手立て
導入 (10分)	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習について知る。 すうじをみて、りんごをかぞえよう。 3 今までの学習の確認をする。 (カード遊び) (1) カード選び (2) カードの穴埋め (3) カード並べ 	・ 教師の言葉掛けに留意させ、学習の始まりを意識できるようにする。 ・ ミニホワイトボードを使い、いつもの学習の流れを確認し、見通しをもって学習に臨めるようにする。 ・ 今までの学習を振り返ることで、定着度を確認したり、達成感や満足感などを味わわせたりする。   <div data-bbox="927 808 1433 954" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>(カード選び)</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 教師が数字を言う。 ② A児は数字カードを取り、教師に渡す。 ③ A児は教師に渡したカードの数字を読む。 </div>
展開 (25分)	4 写真カードやドットカードを見て、その数の具体物を数える。 (1) 写真 (2) ドット 5 数字カードを見て、具体物を数える。 <div data-bbox="379 1256 762 1447" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>写真、半具体物、数字へと段階的に、繰り返し、教材を提示した。</p> </div>	・ 意欲的に活動するために、教材はA児の好きなりんごを準備する。 ・ 初めての学習であることから、難しい場合には、再びドットカードを見て数える活動に戻りながら行うようにする。   <div data-bbox="852 1424 1433 1514" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>教師は、A児に考える時間を設定し、A児の次の行動を待った。</p> </div>
終末 (10分)	6 本時の学習を振り返るためにプリントに取り組む。  7 次時の学習内容の確認をする。 8 終わりの挨拶をする。	・ 児童が頑張った点を紹介し、賞賛することで達成感や満足感などが得られるようにする。  ・ 教師の言葉掛けに注意を向け、学習の終わりを意識できるようにする。 <div data-bbox="807 1906 1406 2029" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>落ち着いてプリント学習ができるように、「よく見ているね。」「できているよ。」など言葉で具体的に賞賛した。</p> </div>

(ウ) 評価 (◎よくできた ○できた △難しかった)

児童	個人目標	評価	具体的な手立てについて	評価
A 児	これまでの学習を振り返ったり、3までの数字カードを見て、その数の具体物を数えたりすることができたか。	○	使用した教材・教具は、内容の理解を促したり、集中して取り組んだりできるものとなっていたか。	△
	学習の流れを理解し、落ち着いて学習に取り組むことができたか。	○	学習の振り返りを行うプリントは、実態や内容に合ったものであったか。	△

(4) 授業研究を通して

「指導目標」、「指導方法」、「指導体制」など、教師の指導の評価の観点を設定し、小学部・中学部・高等部の算数・数学科担当者が授業参観及び授業研究を行った。まず、授業参観時に各自が記入した付せん紙を基に、授業のよかった点、改善点などを出し合いながら、参加者全員で評価の観点別に分類した(写真11)。次に観点別に出された意見等を基に、小学部の課題についてまとめることができた(図13)。

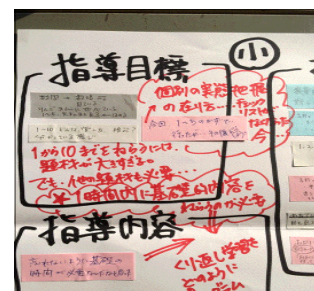


写真11

<p>【指導目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 数唱はできている。 ・ りんごを一列に並べている。 ・ 1～10は分かっている感じだった。 ・ 1～5の数で行ったが、その後の数はどのように進めるのか。 <p>▲ 1から10までの数字をねらうには、題材が大きすぎる。でも他の題材も必要</p> <p>▲ 個別の実態把握の在り方(以前はチェックリストがあったが、やはり必要ではないか。)</p> <p>▲ 1時間内に基礎的内容をねらうのが必要</p>	<p>【指導方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 数量を理解させることが難しい(日々の授業)。 ・ 具体物を操作して教えることで、児童が興味をもって取り組んでいた。 ・ 多感覚の活用(音、手拍子、跳ぶ)。 ・ 声を出したり、身体を動かしたり、全身運動を取り入れる。 ・ 児童の興味がそれとときに、違う作業があると、どんな反応をするか見てみたかった。 ・ 賞賛の方法を工夫する。 ・ 数字カードを見て、お皿にりんごをのせたときに、児童にとってどこで終わりなのか。「終わりました。」の言葉や「終わりましたカード」を使って、意思表示するような手立てが必要。 <p>▲ 児童の実態に合った指導方法の工夫が必要。</p>	<p>【指導体制】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実態把握ができていた。 ・ 数字カードは定着していた。 ・ プリント課題は、問題数を小分けにする。 <p>▲ 実態に応じた個別指導の難しさはある。</p>
<p>【指導内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 忘れないように基礎の時間が必要だと思った。 ・ 繰り返し学習することで見通しをもち、落ち着いて学習に取り組んでいた。 ・ りんごの教材での活動が長いのではないか。他の具体物も活用する(りんご・バナナ・ミカン、赤・青・黄、△・□・○など)。 <p>▲ 繰り返し学習をどのようにプログラムするか。</p>	<p>【教材・教具】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 段階を踏まえてカードを準備していた(ドットのみ→数字とドット→数字のみ)。 ・ 教材提示のとき「りんご」の名称を児童に尋ねる。 ・ ドットカードは場所・位置を覚えているのか。 ・ 4の数を理解しているのか(ドット、2と2)。 <p>▲ 具体物のレパートリーを増やすことで、日常にもつながるのではないか。</p>	<p>【学習環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師と児童の適度な距離は必要 ・ カーテンで集中できる環境をつくっていた。 ・ 席を移動する活動もほしい。 ・ 学習内容にメリハリを付ける(集中していないときは、姿勢の崩れなどが見られた)。 <p>▲ 集中できる環境づくりはできているが、適度な距離感が必要である。</p>
<p>【その他(児童の様子)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童があんなに集中できているとは思わなかった。 ・ ちょっと元気がなかったような気がする。 ・ プリントは自分でファイルにとじる。 ・ 児童は座ってばかりの活動だった。 ・ 少し疲れた様子だった。 ・ 担任をよく見ていた。 		

図13 授業検討会で出された課題等

(5) まとめ

ア 成果

各学部の算数・数学科の年間指導計画を互いに見比べ、情報交換をすることで、小学部・中学部・高等部とも同様の指導内容を扱っていたり、同様の内容であるにも関わらず、題材名が異なっていたりするなどの課題に気付き、系統性のある算数・数学科の題材一覧を作成することができた。その際、児童生徒の発達の段階や自立と社会参加に向けて学部の取組を各学部の

算数・数学科の担当者同士で共通理解することができた。また、同一題材において、各学部で授業を行うことにより、各学部の課題を明確にすることができた。

イ 課題

今後は、算数・数学科における児童生徒の既習事項や学習活動を的確に把握でき、指導の一貫性を引き継いでいけるチェックリスト等を作成し、系統性のある算数・数学科の指導を行っていくことが必要である。

第5章 成果と課題

本研究では、平成24・25年度の2年間にわたって、「特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方に関する研究—知的障害のある児童生徒のp d c aサイクルに基づいた授業づくりを目指して—」を行ってきた。これまでの研究の成果と今後の課題について述べる。

1 研究の成果

(1) 一貫性・系統性のある指導についての整理

特別支援学校における、一貫性のある指導と、系統性のある指導について、長期的な視点や一人一人の教育的ニーズ、発達の段階、生活経験、教科の系統性を踏まえ、整理することができた。

(2) 特別支援学校における一貫性・系統性のある指導に関する現状と課題の明確化

各学校への実態調査の実施により、各学校の現状と課題が明確になった。また、各学校において工夫している取組についても成果として集約ができた。

(3) 「授業づくりの視点」の提案

調査結果の現状と課題を踏まえ、授業づくりのp d c aの各段階ごとに、実態把握に基づく具体的な目標設定の在り方、主体的な活動を促すための工夫や言語活動の充実の工夫、児童生徒の学習評価と教師の指導の評価の在り方、授業改善のための効果的な授業参観と授業検討会の在り方について、「授業づくりの視点」を提案することができた。

(4) 「授業づくりの視点」の活用を通じた各学校での実践例

研究協力員と連携し、「授業づくりの視点」の活用を通じた各学校での実践を行った。共通の視点をもつことで、教師間の共通理解が進んだり、教科の系統性についての見直しにつながる意識の高まりがみられたりした。

2 今後の課題

(1) 「授業づくりの視点」についての提案を行うことができたが、その有効性の検証については、「授業づくりの視点」の活用を通して、授業改善に向けての取組に関する事例を蓄積するとともに、教師の指導の評価の観点などのチェック項目などを再検討する必要がある。

(2) 「授業づくりの視点」の活用を通じた、全体指導計画や個別の指導計画の改善について、十分に検証を行うことができなかった。「授業づくりの視点」を活用し、明らかになった成果と課題を各学校の一貫性・系統性のある指導の充実につなげるための方策等について、具体的に検証を進める必要がある。

本研究は、これまで述べてきたように、特別支援学校における一貫性・系統性のある指導に関する取組の現状と課題を把握し、一貫性・系統性のある指導につながる授業づくりの視点に基づいた授業改善について検証を行ってきた。具体的には、1単位時間の授業づくりにおける授業サイクルに基づいた視点を提案し、授業改善に向けた取組について検証することができたと考える。また、本研究を通して、幼稚部から高等部までの長期的な視点で全職員の共通理解を行うことや発達の段階や教科の系統性を踏まえて指導を行うことが重要であるということが改めて分かった。

本研究が、各学校における授業づくりを通して、特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の在り方等を改善・工夫する取組の参考になれば幸いである。

最後に、本研究を進めるに当たり、実態調査に御協力いただいた全ての県立特別支援学校、実践事例を提供して下さった研究協力員の先生方に心からお礼を申し上げたい。

【引用・参考文献】

- 文部科学省 『特別支援学校学習指導要領』 平成21年3月
- 文部科学省 『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編』 平成21年6月
- 文部科学省 『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編』 平成21年6月
- 鹿児島県総合教育センター 『研究紀要 第108号』 平成17年3月
- 鹿児島県総合教育センター 『研究紀要 第116号』 平成24年3月
- 鹿児島県総合教育センター 『指導資料 特別支援教育第163号』 平成23年10月
- 鹿児島県総合教育センター 『指導資料 特別支援教育第168号』 平成24年10月
- 鹿児島県総合教育センター 『指導資料 特別支援教育第170号』 平成25年4月
- 秋田県総合教育センター 『研究紀要 第41集』 平成22年3月
- 静岡県総合教育センター 『特別支援学校の魅力ある授業づくり』 冊子 平成24年3月
- 静岡県総合教育センター 『研究紀要 第17号』 平成25年3月
- 国立特殊教育総合研究所 プロジェクト研究報告書（平成13年度～平成15年度）
『21世紀の特殊教育に対応した教育課程の望ましいあり方に関する基礎研修研究』 平成16年3月
- 国立特別支援教育総合研究所
『特別支援教育における教育課程の在り方に関する研究
—複数の障害種への対応及び幼・小学部から高等部までの一貫した教育課程の工夫—』 平成22年3月
- 全国特別支援学校知的障害教育校長会 編著
『知的障害教育における学習評価の方法と実際』 平成23年3月 ジアース教育新社
- 飯野順子 授業づくり研究会I&M 編著
『障害の重い子どもの授業づくりPart 4』 平成23年3月 ジアース教育新社
- 横浜市教育委員会事務局
『横浜版学習指導要領 評価の手引き』 平成23年9月 ぎょうせい
- 全国特別支援学校知的障害教育校長会 編著
『知的障害教育における専門性の向上と実際』 平成24年3月 ジアース教育新社
- 藤原義博 他 富山大学人間発達科学部附属特別支援学校 著
『特別支援教育における授業づくりのコツ これならみんな分かって動ける』
平成24年2月 学苑社